

2次元 2D DREAM MAGAZINE

18 未済

試し読み版

10 Volume.90
DIGITAL EDITION

【カラーピンナップ】
伊藤隆生
天海雪乃
ぼっしい

漫画&小説 W掲載!!!!

【漫画】時丸佳久
【小説】磯貝武雄
【挿絵】成海クリスティアーヌ

エルフの国の宮廷魔導師に
なれたので姫様に
性的な悪戯を試みた

今号の
Special Fetishism Series
特集

魔装

The Demonic Armor

身も心も呪われし装備に蝕まれ
邪な存在へと生まれ変わる

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

【えっち漫画】
冬扇

ぼふえ / 楠木りん
老眼 / 天海雪乃

【連載&読み切り小説】

【欲望特急】スレイブバーサー搾精捜査

冬野ひつじ × sasana

ほいほい × みやねあき
酒井仁 × 桐島サトン
089 タロー × NEO草野
新居佑 × 阿呆宮
ウナル × あきのしん
斐芝嘉和 × ぼっしい

ニジマガ特製誌上通販

うるし原智志 原画 BI タペストリー

魔の力を借りた代償として
触手に精気を搾り取られてしまう!



淫魔装姫

アメリア

小説 いしばよしかず 斐芝嘉和

挿絵 ぼっしい

ILLUSTRATION

大地が砕け、空が軋む。

垂れ込める暗雲に稲光が走り、轟く雷鳴が尖塔を、城壁を、砂糖細工のように突き崩す。

千年王国バルトリア、その王都・ナタエル。尖塔の都と呼ばれた城塞都市は、たった半日で崩壊の危機に瀕していた。

暴れているのは巨大な魔物。高さは城壁に比肩し、尖塔よりも太く長い触手を何本も何十本も振り回しながら、王都の東半分、旧市街区を突き崩し、薙ぎ払い、傍若無人に踏み荒らしている。

いや、違う。
鞭のようにしなる太い触手が狙っているのは、足下を走り回る小さな影。

清らかな光を放つ聖剣を携えた若い娘が、艶やかな黒髪を靡かせながら瓦礫の山を踏み蹴って、魔物へ果敢に斬りかかっているのだ。

「ちいさえええいいいっ！」
気合い一閃、右から迫る触手を擦り上げて撥ね斬る。左足を進めながら頭上で剣を回し、

「ぬんっ！」
大地を断ち割るような勢いで袈裟懸けに、正面から迫る触手を斬り落とす。

姫将アメリカ、バルトリア王家の四女。
剣技の腕前は王国一、近衛騎士団の副将を務めている彼女は、騎士団が崩壊したあともたったひとり

で戦い続けていた。
臣民を守るのは王族の義務。

それに、
（すごい……ベリアル製の鎧、伊達じゃないッ！）

千年前、建国の七英雄がひとりの魔導士と協力し、一匹の魔物を退治した。命を絶つことはできなかったが、無数の断片を拾い集め、魔法によって鎧と化すことで、その復活を阻止した。

それがこの、ベリアル製の鎧。

払腕に現れた巨大な魔物に近衛騎士団が粉碎されたとき、アメリカはこの、伝説の鎧を思い出した。

宝庫を開けて装着するまでに思った以上に時間がかかり、被害が膨れあがってしまったが、
「これ以上、お前の……好きには、させないッ！」

いまは五角以上に戦えている。
鎧化されたベリアル製の断片はひとつひとつがまだ生きていて、周囲に立ち込める瘴気を完全に中和

水のように冷たく滑らかな内張が姫将の柔肌にヒタツと吸いつき、しなやかに躍動する手足をさりげなく支え、助力し、加速。

装着者の意思を魔力で読み取り、増幅するのだろう。ただでさえ鋭いアメリカの太刀筋が、ベリアル製の助力を受けて刃先に刃え、強大な魔物の太い触手を軽々と斬り伏せ、あっさり切り飛ばす。

（戦える……けれど、こんな末節をいくら斬ってもラチがあかない。もつと深く、もつと奥へッ！）

左側から飛んできた触手を剣の側面で弾き上げ、瓦礫を蹴って深く踏み込むアメリカ。形よい乳房を跳ね揺らし、艶やかな黒髪を靡かせて、十数メートルの間合いを一気に詰める。

太い触手の根元まで潜り込んだら、聖剣を下段に構えて身体を縮める。
（力を貸して、ベリアルッ！）

古の魔物に胸の内呼びかけつつ、大きく吸い込んだ息を止め、意識を丹田に集中。

錐のように尖った殺気を足下から突き立てられ、巨大な魔物が身じろぎした。うしろへ退がろうとしたのだから、その瞬間――。

「――シッ！」
鋭く息を吐いてアメリカが跳躍、矢のような速さで天へ。

擦り上げた聖剣が魔物の胴体に縦一直線の裂傷を

深々と刻む。城壁より高く高く舞い上がったあと、自然に落ち始めた身体を鎧の魔力で加速し、
「成敗ッ！」

大上段から唐竹割りにトドメの一撃。
捏ね上げたパン生地を拳で叩いたときのように、巨大な魔物の真ん中が大きく凹んだ。アメリカの剣技によって一点に集中された聖剣の霊力が、鎧の魔力によって何十倍、何百倍にも増幅され、凄まじい衝撃となったのだ。

魔物の足下が砕け、大きな穴が口を開く。旧市街区の地下、網の目のように張り巡らされた下水道を踏み抜いて、巨大な身体が為す術もなく落ちる。

魔物自体が大きいいため、穴は浅く見えるが、実際には五メートルほどの深さだ。

その縁に触手をかけて這い登ろうとするが、中樞を破壊されたことで魔力の繋がりを維持できなくなったのか、次第に動きが鈍る。端から腐り、ドロドロと溶けて颓れていく。

「……」
腐肉の塊と化していく魔物の中央にふわりと降り立ったアメリカは、しかし、まだ気を抜かない。

ベリアル製の鎧が、警戒を解いていない。
鎧を構成する魔物の断片たちの、油断なく身構えているような気配が、冷たく滑らかな内張を通して伝わってくる。

（まだなにかあるの……あつ!!）
腐り溶けていた魔物の残骸から、突如尖ったモノ

が何本も、何十本も、一斉に突き出してきた。羚羊の角に似た、硬質化した触手だ。咄嗟に飛び上がったアメリカの細い腕を、伸びやかな脚を、骨質の槍が掠めて伸びる。

「くう……ッ！」
咄嗟に逆手に持ち替えた聖剣で、迫る先端を弾き

砕く。刃だけでなく、峯も柄も総動員だ。

「ッ!?!」

喉元に、軽い衝撃。

斬り跳ばした穂先のひとつが別の骨槍に当たって跳ね返り、鉾突き首輪を掠めたらしい。

細いようなじを守るその首輪も鎧の一部、つまりベリアル欠片だから、滅多なことでは壊れない。実際、アメリアの肌には傷ひとつついていない。

しかし、慌てて喉元を探った姫将は、みるみるうちに蒼褪める。

そこに詰め込まれていた魔晶石が、砕けていた。

ベリアル欠片を制御し、鎧として統一しておくための、大切な要石が。

（魔物を退治しても、ベリアルが復活したら意味がない……!）

焦る間もあらばこそ、

「くっ?! うう……ッ!?!」

いきなり鎧の内側に、無数の指が生じた。いや、指というよりむしろ、何千何万という芋蟲か。

水のように冷たく滑らかだった内張が細かく分裂し、プリプリとした弾力の塊になった。そのひとつひとつがそれぞれ別の生き物のように蠢き、蠕動し、

アメリアの柔肌を揉みまくる。

乳房や腹などを覆っていた半透明の部分は流動し分裂し、いやらしいスライムのようになった。不気味に伸縮しながら乳肌を舐め回したり、ヘソの周囲を這い回ったり。

そこへ――。

「大丈夫ですか、姫様ッ!?!」

生き残っていた兵たちが頭上の穴の縁に顔を覗かせた。腐り溶けている魔物の残骸を恐ろしそうに見回しながら、瓦礫伝いに降りてこようとす。

「来てはダメッ! 魔導士を集めて!」

「魔晶石が壊れました。ベリアルが復活しかけてい

ます! 早く……私ごと焼き払いなさいッ!」

「そ……そんな……!」

「時間がない! 急げッ!」

叫ぶ姫将の鎧から、にゆるん、にゆるん、と伸び出す肉色の触手。

気づいた兵たちの顔色が変わる。伝説に語られている魔物・ベリアルが復活しかけているのなら、自分たちだけではどうしようもない。姫を焼くにして助けるにしろ、とにかく魔導士の力が必要だ。

「いますぐ掻き集めて参りますッ!」

踵を返した兵たちが、穴の縁の向こうに消えた。

「……ううっ!?!」

剣に縋りつくような恰好で膝を着くアメリア。

ブーツの中の内張までもが無数の触手に変化。脛を揉み込み、踝を這い回り、足の裏をくすぐって指の股を舐め回す。

（これが……ベリアル……）

伝説によれば、女性を淫気で狂わせるいやらしい魔物だったそうだ。そんなモノの断片が、直接肌に触れている。指のような弾力で柔肉を揉み込み、舌のように広がってヌチャ、ニチャと冷たいぬめりを塗り広げている。

「なんていやらしい……!」

美しい肩を逆立てたアメリアは、鎧の除装を試みた。が、思った通り不可だ。

肌に密着したベリアル欠片は、姫将の意思を読み取っている。脱ごうとすれば締めつけを強めて抵抗するし、聖剣の刃を当てようとするれば腕が逆方向へ捻られてしまう。

「ううっ!?!」

股当ての内側に無数の触手が生じ、恥ずかしい割れ目や穢らしい肛門がまさぐられ始めた。慌てて手を伸ばすが、手甲の内張が意地悪く蠕動して腕が

捻られ、狙った場所に触れられない。そればかりか、「あッ!?! こ、この……や、やめろッ!」

掌を軽く窪めた両手が己の股間に触れ撫でるようにしごくようにリズムミカルに上下。股当ての上から敏感な秘処をまさぐっているような、卑猥な動きを強制されてしまう。

（こんな姿を、だれかに見られたら……ッ!）

カアツと頬を赤らめたアメリアは、全身全霊を込めて手を股間から引き剥がした。恥ずかしいひとり遊びを強制されることはなくなったが、股当て内部の触手を抑えることも不可能。

「く、あ……ううっ!?!」

小指くらいの太さ、長さの触手が十数本、上下左右あらゆる方向から恥ずかしい割れ目に迫る。プリプリとした弾力に肉嵌の縁が引っかけられ、無遠慮に割り開かれてしまう。

尻側に生じた肉紐は、それぞれが細かく振動しながら尻房を揉みだて、撫でまくり、尖った先端を鎧の外へはみ出させたり、キュツと窄まる菊蕾に添えて強張る括約筋を揉み解したり。

どちらも敏感な部分だから、そこに湧き上がる淫悦は乳房や腹のそれとは比べものにならないほど鮮烈で抗いがたいが、

（だ、だいじよう、ぶ……これくらいなら、耐えられる……魔導士が集まるまでの、辛抱、よ!）

ともすれば股間へ伸びようとする両手を剣の柄に置き、心地よい恥辱に懸命に耐えるアメリア。

建国の七英雄をして倒しきれなかったベリアルは、強力な魔物には違いないが、鎧に使われているのはその一部。そのうえ分割され、繋ぎ直され、魔晶石

によって制御されていたのだから、本来の能力はまだまだ発揮できていない――はず。

ならば、耐えられる。

いや、耐えなければならぬ。

いや、耐えなければならぬ。

THE DESIRE EXPRESS 欲望特急

スレイブパーサー  搾精捜査

[2日目 波館~鳴室] 淫獄への分岐

小説 NOVEL どの冬野ひつじ
挿絵 ILLUSTRATION sasana

屈辱の精液収集なのに
快樂を覚えこんでしまう

肉体



■04..28 苦救付近
 渡嶋内 乗務員車 乗務員仮眠室

ガタンゴトンと規則正しく繰り返されるリズム。それがレールを刻む車輪の音だと気づくまでに、しばらくかかった。

(いけないッ！ 寝てた……ッ?)

乗務員仮眠室のベッドで、理緒は飛び起きた。

二段になったベッドの上から小さな寝息が聞こえている。ここは二十四時間体制で乗客達の世話をするパサーが唯一身体を休める事のできる場所だ。

だが、新人捜査官にとっては、ここですら心休まる場所ではなかった。

(私……確か、センターからの連絡を待って……そのまま……?)

慌てて制服のポケットから通信機を取り出し、待受け画面を確認する。だが、着信の履歴は一件も表示されていない。

(結果がまだ出てないって事……? いや、確か二時間あれば終わる検査だったはず……もう四時間も経つのに、どうして連絡がないの……?)

外は暗い。空にはまだ星すら見える。しかし、順調に検査が進んでいけば、もうとっくに連絡が来ているはずの時間だ。

(何かあった……? いっそこっちから直接確認を……いや、それはダメだ……)

渡嶋の乗務員達が私用の携帯電話などを身に付けているのは、保安上固く禁じられている。やむを得ない事情で外部の人間が乗務員に連絡を取りたい場合は、まずチーフパサーの鶴飼に繋がれ、彼の判断で各乗務員の通信機に電話が転送される仕組みだ。発信の際はその逆の手順を行う。世界中からVIPが乗車する列車となれば、潜入捜査官としてそこは例外ではなかった。

(潜入捜査……そうだ、私はそのためにあんな男の精液を……!)

終わった事だと分かっている、ロストパージンの瞬間とその後の屈辱的な作業を思い出してしまう。(ドロドロして、臭くて……何度洗っても指に纏わり付いてなかなか取れなかった……)

思い出した途端に生臭い匂いが口中に甦り、吐き気が込み上げた。

(私の初めてと引き換えにして手に入れたのに……これでもし失敗だったら……?)

嫌な想像が胸の中で次々と広がる。

(採取の仕方が悪かった? いや、ちゃんと指示通りに規定量を容器に入れて……うう……ッ! あんな事、早く忘れたいの……!)

(……ダメだ……しつかりしなきゃ……)

ベッドから降りて洗面台の水で繰り返し口を濯ぐと、ようやく気分が落ち着いてきた。

(……どつちにしろ待つしかない……とにかく、逮捕状が出るまでは、黒岩達に怪しまれないよう、しつかりパサーを務めなければ)

ポーチを取り出し、ルージューを引き直して鏡の中の自分にそう言い聞かせた次の瞬間、通信機がチーフパサーからの着信を知らせた。

「《東京のご家族》から連絡が入っています。すぐにいらしていただけますか?」

やや緊張を帯びた声で伝えられた思わぬ符丁に、理緒の心臓が大きく高鳴った。

「はい……はい、しかし……いえ、その点は大丈夫です……はい……」

本部からの指示を受けながら、理緒は立っているのがやっとだった。

(サンプルと一致しなかったって……どういふ事なの……?)

ショックのあまり電話の向こうの上司の声がはるか遠くから響いているように聞こえる。

「……では、このまま乗務を続けます」

通話の間退席していた鶴飼が遠慮がちに戻ってきた後も、放心状態で身体が動かない。

「何か、不都合な事態でも発生いたしましたか?」

鶴飼の問いに、理緒はただ首を振って見せる。

「差し出がましいとは存じますが、その……お顔の色が、良くないので……」

目尻を下げて常に眩しそうな目と口角が上がった鶴飼の口元は、善人を絵に描いたようだ。今回の潜入捜査にあたり、渡嶋車内で唯一事情を知っている者である。捜査内容は一切秘匿されているため、実際には捜査官の行動の全般を黙認するという形の捜査協力ではない。しかし渡嶋のような豪華列車内で覆面捜査官を無制限に行動させるといふ負担はチーフパサーである彼に重くのし掛かっているであろうとは想像がつく。

「大丈夫です……ただ、捜査の件でちよつと……その、デリケートな手法も取らざるを得ないのは分かっているのですが……いかなせん私が未熟なもので思うようにいなくて……」

話せるのはここまでだ。それでも鶴飼は大きく頷いてくれる。鶴飼もこの潜入捜査が黒岩達に関連しているという事は察しがついているようだった。

「なら良いのですが……」

これ以上この実直な鉄道マンの気苦労を増やす訳にはいかない。理緒は無理矢理口角を上げて見せた。

「申し訳ありません。捜査がずれ込んでしまったので、当初の予定を変更してこのまま終点まで乗務させていただきます。鶴飼さんには引き続きフォローをお願いいたします」

これからはもう、パサーとしての職務を考えないでなりふり構わずに動く必要がある。

これからはもう、パサーとしての職務を考えないでなりふり構わずに動く必要がある。

「それと、あの、改めてお願いなのですが……」

うら若き捜査官は背筋を伸ばし、チーフパーサーに念を押した。

「全て私の判断で動くように指示がありましたので、何があっても、もし私の姿が見えなくなっても……終点まで絶対に探さないでいただけますか？」

「どうして……どういう事なのよ……ッ!？」

誰もいない乗務員車の通路で、理緒は冷たいガラスに額を付けながら何度も自問する。

（だって、あの精液が黒岩のモノじゃなかったとしたら、一体誰がお母さんを……!?)

同じ言葉がぐるぐると頭の中を巡り続けていた。「どうして? どうしてどうして?! 絶対アイツの仕事なのに……!」

鵜飼の部屋を後にする時には辛うじて平静を保っていたいられたが、ここまで歩いてきた途端、感情の糸が一気に切れたのだった。

「こんな嘘よッ! ありえない……ッ!」

できるものなら大声で泣きたかった。「もう嫌だ……どうして……!?! 昨日のアレは無駄だったって事なの……!?!」

薄れかけていた破瓜の疼痛が、嘲笑うかのように身体を中心に刺し貫き、遂に新人捜査官は通路に膝を突いてしまった。

（あんな思いをしたのに、全部……やり直し……、）

これ以上の辱めを受ける事はないという安堵でやつと保たれていた神経は、限界に近くなっていた。（やり直し……初めから、近付いて……誘惑して、セックスして……）

つまりは、終わつたはずの責め苦をまた繰り返す事に他ならない。先ほどの通話の中で、明晩、再度収集した精液を引き渡す手筈を伝えられた。

（もうやりたくない……あんな思い、二度としたくない……）

ない……）

乙女の額には汗が滲んでいた。（……でも……これでは終われない……だって、犯人は必ずあの中にいる!）

理緒は震える手を制服の内ポケットに差し込む。（本部は、蛭間、九鬼、それに小暮の三人が、事件当日、黒岩と共に現場にいたことを把握している）

取り出したのは写真だ。角が欠け、色褪せかけているそれは、ほんのりと熱を帯びている。

（お母さんを犯したのが一人とは限らない……黒岩の他にあの三人のうちの誰かの精液が残っていたとしたら……!?!）

事件の少し前に撮った最後の家族写真。そこに写る母の姿を、指の腹で愛おしむように撫でると、僅かずつ力が湧いてくるのが分かる。

（私がすっかりしなきゃ……ここで諦めたら、これまでの全てが本当に水の泡になってしまう!）

窓の外は白みつつあった。新しい一日はもう始まっている。

「……結構走ったんだ……もう、窓の外の風景が、全然変わってる……」

薄明の原野のあちらこちらで、首長竜の頭にも似た黒いシルエツトが休みなく頭を上下させている。

昨年から本格的に採掘が始まった油田の間を、渡嶋は真つ直ぐに進んでいる。

（そろそろ乗務員室に戻らないと……）

理緒は立ち上がり、写真を再びポケットの奥深くに注意深くしまった。

（……これもまた運命なのかもしれない）

見渡す限りの平原を、直線に伸びた鉄路が切り裂いていく。

（もし私の乗るこの列車が、運命という名のレールを進んでいるのなら、最後はきつと……犯人を逮捕する結末しかありえない!）

■07:04 新潟張付近

渡嶋内 コンシェルジュカウンター前

「茨戸さん、そちらが黒岩様のお品です」

カウンターの向こうで、コンシェルジュの三木本玲子（れいこ）が微笑んでいる。

渡嶋におけるコンシェルジュはサブチーフも兼任しており、実際には乗客達の対応で何かと多忙なチーフパーサーの鵜飼に代わって玲子がパーサー達のお目付け役を務めている。

「すぐに使いたかったので特別浴室まで大至急届けて欲しいとの事でした」

玲子は十ヶ国語を操る三十代後半の元ホテルウーマンだ。数年前のサミットで各国首相の対応を任されていた才媛である。

（これを、大至急……? あの男……これから忙しくなるって時に、一体何なのよ……!?!）

フロントからの突然の呼び出しで駆け付けた理緒に渡されたのは、苦牧駅で積み込まれた大きな段ボールだった。送り状には黒々とした字で「バス用品」と書かれてあるだけだ。

（どこの通販会社だろう、聞いた事ないけど……）

首を傾げている新人パーサーに、「くれぐれも粗相のないように、お願いしますね」と、才媛の声が畳み掛ける。

「は、はい」

乗客達が渡嶋の車内から通販サイトを使って商品注文する事は少なくない。翌日配送がモットーの通販会社のもものは、どこを走つていようと急送便やドローンを使って必ず翌日に乗客まで届けられる。

これもそうした商品の一つなのだろう。（でも、わざわざこんな時に……?）

黒岩が待つという特別浴室は、デラックススイー

トが連なる車両の一番端にある。波館駅で積み込まれた源泉を使用したお風呂に入れるが、完全予約制のため周囲に人影はない。

「……失礼いたします」

辿り着いた特別浴室のインターホンを鳴らすと、横開きのドアが自動で開いた。

「待ってたぞ」

脱衣所の向こうに明かりが点いている。やはりと言うべきか、黒岩は腰にタオルを一枚巻いただけの姿で浴室から顔を出すと、理緒の手から段ボールを取り上げた。

「では、失礼いたします……」

下がろうとする新人パーサーの手を、日焼けした太い腕がガツシリと掴む。

「お前も一緒に入るんだ。服を脱いでさっさと来い」

五分後、バスタオル一枚を巻いた理緒は特別浴室の入口に立っていた。

「見る、お前に相応しい仕事場を作ってやったぞ？」

「……こ、これは……？」

浴室の壁には、窓の代わりにガラスのプレートが飾られている。浴槽はやや小さめだが、それでも大人二人が入るには十分な広さだ。

だが、アールヌーボー調の優美な空間には似つかわしくない異物が幾つか置かれている。金色で奇妙な形をした樹脂製の椅子。何やら液体が入っているらしい安っぽい小瓶。そして、壁に立て掛けられた毒々しい蛍光色を放つ、ピンクのエアマット。

「お前は今からソープ嬢だ」

「あ……ッ!？」

バスタオルを乱暴に剥ぎ取られて理緒は小さな悲鳴を上げる。全裸を男の目に晒すのは初めてだった。男はニタニタ笑いながら白く輝く裸体をじっくりと目で犯している。形の良い乳房に、美しく丸みを

帯びたヒップ。法の番人にしては均整の取れたポデ

イラインだが、その正体を知らない黒岩にとつては涎が出るほどの極上の女体なのだろう。

「ソープ嬢っていうのはなあ、一回膣内射精許しただけが仕事じゃないんだ」

虫唾が走るような下卑た囁きをすると、黒岩は浴室に戻る。

「毎日毎日誰とも知れぬ男を相手に生のマンコでもてなしをする……チンポにご奉仕するのが日課になり、生活の一部になる……なあ、これこそお前に相応しい、サービスの神髄だと思わないか……？」

樹脂製の椅子にどっかりと腰を下ろし、犬でも呼ぶような手招きをした。

「さて、それではまずは身体を流してもらおうか」

「……はい」

こうなったらもう観念して付き合うしかない。(ソープごっこ? どこまでもふざけた男ね!)

怒りで震えそうな手で備え付けの海綿を取り、ボディソープを泡立たせる。凝っているのはボトルのデザインだけではないようだ。瑞々しい花の香りはこんな時でなければいつまでも嗅いでいたいと思わせる香しさだが、だが、即席ソープ嬢がそれを愉しむ事は許されない。

「では、お身体を……流させていただきます……」

男の後ろに屈み、まずは海綿を背中の上から下までなめらかに滑らせた。日焼けした背中がたちまち泡だらけになる。

「お前の身体にも泡を塗りたい。おっぱいでしっかり洗うんだ」

「えッ……?」

黒岩の指示に理緒は耳を疑った。

(今の、本気? おっぱいで身体を洗えなんて……) 内心では憤るが、もちろん拒絶という選択肢はないも同然だ。言われた通りにするしかない。

(こんなの、何が楽しいのよ……)

理緒は海綿をキュッキュッと何度も揉み、泡を全て胸の谷間に乗せた。

(私の身体、まるで道具みたい……) ムース状の泡を乳房と下腹部に広げれば、それらしい格好になる。

「……んッ」

両手で乳房を持ち上げ、泡に覆われた背中中に当てる。押し付けると、見た目よりも筋肉質な感覚が乳首の奥まで伝わってきた。

「おお……この肌といい身体つきといい、やはりパーサーにしておくには過ぎた代物だな……マゾ牝の素質タツブリだ」

「あ、ありがとうございます……ッ……」

自分の身体を上下に揺らすたびに、乳首が擦れ硬くなるのが分かる。

「んあ……ッ、こんな感じで、よろしいでしょうか……ッ……?」

小さく息を漏らしながら機嫌を伺う。嫌悪感はず日と変わらないのに、媚びた声はすぐに出せるようになってるのが悔しい。

「うむ、随分ときこちないが、悪くはないな。だが、洗う所は他にもあるぞ」

男はやおら立ち上がると腰のタオルを外した。

(こ、こんなに大きくなってるの……!?) 現れた男根は隆々と勃起している。

「どうだ? 昨日の晩を思い出さか……? 洗わないで寝たからお前の匂いがそのまま残ってるぞ?」

「……ッ!」

そんなはずはないと思っても、恥ずかしさで男の顔をまともに見られない。慌てて追加のソープを泡立てて立ち上がると、向かい合い、抱き寄せられるままに互いの身体を密着させた。

「うむ、いい触り心地だ……パイズリにはお誂え向

きだ……ますます気に入った」

屈伸の要領でゆつくりと身体を上下させ、男の股間をまずは腿でマッサージする。

「こうしているとまるで恋人同士の気分だな？ そうは思わないか？」

（なッ、何が恋人同士よ……！ 私の身体をスポンジ代わりにしておいて……！）

肉棒を洗わせている間に、黒岩は理緒の身体にたつぷりとボディソープを塗った。うって変わった慈しむかのような手つきに恥ずかしさを覚えてしまう。

（ああ……はあ……何よこんな触り方して……気持ち悪いだけだつてば……）

泡を塗り込めるかのように胸を揉まれ、掌でヒップを撫でられ、息が弾んでしまう。

（これは湯気でのぼせかけてるだけ……感じてるとかじゃない……）

腰を落とし、先走りとしおっぱいでヌルヌルになった乳房の間に肉棒を挟み、前に後ろに身体を揺らして刺激していると、身体のを男に使われているのだという屈辱感が唇が震える。

（私を感じさせているんであって、私は何も……）

だが、実際には理緒の身体もまた男の身体に刺激を与えられ、快感を覚えていた。乳首は尖り、湯気の中でもくつきりとその充血の様子を隠せない。

（こんなの……ッ、汚らわしい……女の尊厳を踏みこじって喜ぶような真似を……）

完全に挟み込む事はできないが、それでも懸命に乳房で包むようにすると、ペニスは硬度を増して淫らな遊びにご満悦のようだ。

「いいぞ……お……ハァッ、そうだな、まずはこのまま……一発胸に出しとくか……ッ」

自分の乳房に覆われてヒクヒクと蠢くペニスを、乙女は見下ろす。

（ここに!? こんな所に精子を出すの!?）

乳房は乳房だ。愛撫されるのは分かるが、射精される場所だとはどうしても思えない。それでも、「はい……ッ、どうぞお出し下さい……ッ！」

吐息を漏らしつつ理緒は美乳で肉棒を抜き上げた。（早く……ッ、早く出してよッ！ このままじゃのぼせて変な気分になっちゃう……ッ！）

肉棒の怒張のリズムに合わせるようにして、二つの乳房からひたすら快感を送り込む。

（もつと感じなさいよ……ッ！ 早く精液、出しなさい……ッ！）

ムニユウッ、ムニユウッ、と桜色に色付いた白い柔肉が、牡の滾りを吸い尽くそうと妖しく蠢く。まるで本物の恋人同士のように呼吸を合わせ、理緒の身体は男を快感の頂点へと押し上げていく。

「出すぞッ！」

ビュルビュルビュルッ！

黒岩の咆哮と共に、顎の下から激しく白濁が噴き上げた。

「んッ!? んうッ、んんん……ッ！」

（ふぁッ……激し……ッ！）

避ける間もなく、理緒は顔面でまともに精液を受け止めてしまう。

顎から乳首の先にまで、至る所に白濁の糸が橋を架け、また一つ女捜査官の尊厳に消えない汚点を染み込ませた――。

しかし、一度射精させたくらいでは、泡姫は休ませてはもらえない。

湯船で身体を弄られた後は、マットの上で、理緒は黒岩に跨り、泡を洗い流したその身体に今度はローションを垂らしていた。

「んあッ、そんなに吸われたら……ンむうッ……マッサージが、はあッ、できないです……」

時折舌を伸ばし、男の舌と絡ませる。ローション

でテラテラと光る肌の上を乳房やヒップで撫で、刺激するのが、次の理緒の仕事だった。（自分で動けばいいのに……まるで私が、はあッ、したくてしてるみたいじゃないの……）

仰向けの黒岩の上でうつ伏せになって身体を揺すっている、本当に自分がソープ嬢になっているような気分になってくる。

（胸……ッ、擦れてジンジンする……）

黒岩は時々指示を出すだけで、自分からは動かない。さっきまでの執拗な責めは何だったのかと思うくらいに理緒のどこもない愛撫に身を任せている。

ちゅぱッ、びちゅ……ッ、ぬちゃッ、ちゅぶ……ッ。一度射精しているにもかかわらず、泡に塗れている黒々と勃起しているペニスには極力触れないように、脚を開いて少しでも男の身体からは遠ざかろうとしているのに、ローションは重たげに糸を引き、肌と肌を淫らに繋ぐ。

「ん……ッ、ちゅぱ……ッ、ちゅく……ッ……」

エンドレスで行われるディーブキスとマッサージが、自分の身体の輪郭を曖昧にぼかし始める。

「んん……ッ、ふう……ッ……」

浴室には淫靡な水音が響いていた。馥郁たる花香る格調高い空間は、今やソープブランドの一室になり果てている。

（コイツ、ひよつとしてこれだけで終わらせるつもり? だつたらすぐに他の三人の所へ移れる……）

そう思うと同時に、下腹部が微かに疼いた。（あれ……? 今の、何……?）

理緒の姫割れには、指一本入れられてはいない。なのに、今、そこからはローションとは明らかに違う液体が、トロトロと滲み始めていた。

（……ッ、余計な事は考えちゃダメ……!）

しかし、妙な感覚を振り払おうと目をつぶったのが間違いだつた。



とどにかく
一旦逃げて各個撃破を…

こんな数が多いなんて
聞いてない…っ

くそっ…
簡単な討伐依頼の
はずだったのに…



…腹を括るしか
ないようだな

まったくもう…
無事に帰れたら
報酬上乘せして
もらわなきゃね!!

モンスターに追われる女騎士たち…
その切り札は触手鎧!?

鎧に集食者



うっ…!?



…開まれたか



まずい…一人で
ギリギリの相手なのに…

このままじゃ
やられる…っ

仕方がない…
切り札のこの鎧…

召喚魔装の力に
頼るしかないか…

持ち主の心を削って
鎧に宿った魔物を使役する

我が家で封印されていた
呪いの鎧…

少しは制御できるように
なったけど…

このままじゃ
自分の身を守るの
で精一杯だ

マリアも守るためには
もっと力を解放しないと…!!

胸当て…

腰当て…



封印解除!!



しかし…気持ち悪いな…
肌に直接触手が…

ん…
…
…

さっさと脱いで
片付けないと…!!



やっ…
これならいける…!!

まあ…
…
…

…
…
…





な…あっ!!

よ呼び出した触手が…
鎧の中で蠢いてる…!!

なっ

ややめっ



イイマダッ

ひっ…
ややめろ…っ

イッセイニカカレ!!



だ駄目だ…
もう抑えつける精神力が…

あああああっ
中で動くなあっ…



これ以上…
力を使わせるなっ…

グラビアアイドルという
素顔を隠して戦う正義のヒロイン
その戦闘服が淫らな牝堕ち化粧となる!!



変身天使 ブレイズエンジェル

～紅の天使と黒き魔装～



著者近刊
子作りヴァルキリー!
戦乙女を孕ませちゃえ
好評発売中!

小説 おばきゅー **089** タロー 挿絵 ね お く さ の **NEO** 草野

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～5の番号がふられていますので、各シーンの末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

【シーン1：紅の守護天使】

「はあはあ、助けて誰か、誰か……！」
真夜中の都会、その片隅で、一人の女が必死に裏路地を逃げ惑う。

彼女は追われていた。生命の危機から。人ならざる異形から。

20××年トウキョーシティ。この大都会には、しばしば異形の怪人が現れる。出自や目的は不明だが、彼らは夜に人を襲い生命や貞操を食らう。今また一人の哀れな女性が怪人の餌食になろうとしていた。

「ヒビ、もう逃げ場はないゾ。大人しく食われろ……犯されてからナ！」

「やああああつ！」

袋小路に捕まった女は服を裂かれて両足を開かれる。相手は異形、狼のような頭部と体毛を持つ大柄な怪物。人ならざるその力の前に成す術なく組み敷かれ、そそり立つた禍々しい肉根をあらわな秘裂に押し当てられる。

照明すらない寂れた路地には悲鳴を聞きつける者もない。いたとしても怪物相手に立ち向かうことなどできない。

もはや女の貞操も命も風前の灯。

だが――

「――欲に駆られた悪しき獣。その見境のない手を離さない！」

凜とした声が怪物の手を止めた。

女と異形が見上げる先。高くそびえ立つ鉄塔の頂点に一つの人影があった。

若い女の声。そう、一目で女と知れる胸と腰つきのシルエツトだった。

すらりとした身体を覆う、びつたりとしたボディスーツ。目元を隠すバイザーつきのヘルメット。燃えるような色のそれらは一見して戦闘用で、手首や足首、額などに機械仕掛けの意匠があった。

その一方で露出は多く、大きく膨らむ豊満な胸は大半が見えている。太腿や下腹部も露出が多く、シヨーツ型の股布は際どいハイレグとなっていた。地毛であろう茶色の髪は、ヘルメットの両端からツインテール状に伸びている。女が右手の剣をかざすと、髪と胸が緩やかに揺れる。

「トウキョーシティを荒らす怪人。無力な女を汚す存在。お前たちを見過ぐす気はこのわたし――ブレイズエンジェルにはない！」

女は言い放ち、空高くジャンプした。月を背にしたその姿は美しかった。赤く輝く戦天使と見紛うくらいに。同時にその肢体は、実に艶めかしい曲線を描く。すらりとした長身ながらも女性特有の起伏が目立ち、スタイリッシュな色香を感じさせた。

その豊満な肢体が急降下してくる。銀色に輝く剣を振り上げ、落下の勢いで異形を切り裂く。

「ぐあああアツ！ くそオ、またしてもエンジェルウ！」

「この街はわたしが守つてみせる。お前たちフォールンクルスの手から！」

筋骨隆々の強靱な体躯が真つ二つに両断される。

迸る血しぶき。そのどす黒い鮮血は、しかし美女のスーツには触れられない。目には見えない強い力場が寸前で弾き返している。

どう、と倒れ伏す恐るべき異形。その血を剣から払い、美女――ブレイズエンジェルは言う。

「こんな月夜の晩には特によく現れる……けれど負けない。わたしは戦う」

寸前で助かった女は、その美女をただ呆然と見上げるばかりだった。

※

「――皆さん、今日はDVD発売記念イベントに集まってくださって、本当にありがとうございます！」
数日後のトウキョーシティ。都心部にあるとあるホールでは、一人のグラドルの新作発表記念会が行われていた。

「おお、やつぱ聖瑠ちゃんキレ〜」
「俺ぜつたい買うから。ねえ聖瑠ちゃん、こつち見て〜！」
集まってくれたファンの中から黄色い声援が飛ぶ。

彼らに笑顔を振り撒くのは、天ノ宮聖瑠。今売り出し中の若手グラビアアイドルだった。

ふんわりとした長い茶髪の、ものすごく綺麗な美少女だった。目鼻立ちが整っていて若干目尻が上向きという、少し勝気そうな顔立ちをしていた。そんな彼女のアピールポイントは、

当然そのボディである。上から95、58、90という見事な数値は、170という長身もあって豊満かつスリムなモデル体型を作っていた。

特にバストはHカップもの超巨乳で、ファンの視線をいつも集めている。今も壇上で身動きするだけでゆさつ、ゆさつ、と揺れていた。

「皆さんと一緒にいる気分ですばい撮影してきました。今度は皆さんがこれを見て、一緒にいる気分を味わってくださいね」
その聖瑠が、白いピキニを着て商品を手には笑顔で浮かべる。勝気そうな顔に浮かぶ少し照れ臭そうな表情が、ファンの心を余計にくすぐった。

「ああ堪らねえ、抱き締めたくなっちゃうぜ」

「身体はエロいのに真面目そうで、マジでいいよ」
「遊んでる感じとかぜんぜんないしな。そこのグラドルとはそこが違うぜ」
素直に喜んでくれる客たち。

その様子を見渡していた聖瑠は、ふと耳にした言葉に気を留める。

「でも心配だなあ、聖瑠ちゃんみたいな美人がもしあいつら、フォールンクルスに襲われたらと思うとさ」

「だよな。最近も近くで出たらしいぜ」
フォールンクルス。墮落の十字架。突如として現れた異形の怪人たち。その存在は広く知れ渡り、人々の心には常に不安がつきまとっている。だが希望はあった。それこそがブレ

イズエンジェル。怪人どもを倒し、このトウキョーシテイを守る女戦士だ。

そしてその正体が、この天ノ宮聖瑠であることを、人々は知らない。

「でもブレイズエンジェルがいるから平気さ、きつと」

「そうそう、噂のエンジェルが俺らも聖瑠ちゃんも守ってくれるって」

ファンの中から希望の笑顔が漏れてくる。

嬉しさと、くすぐったい気分を覚えて、聖瑠は小さく微笑んだ。

（ふふ、変な気分。誰もエンジェルがここにいるってこと知らないなんて）

左の手首をそつと見る。そこには金に輝くブレスレットがあった。

それこそがブレイズエンジェルたり得るもの。身体能力を劇的に強化する特殊なパワードスーツを着るためのアイテムなのだ。

これを使って彼女は日々戦い続けている。グラドルとしての活動の裏で、街の平和を守るために。

（この仕事は大好き。みんなに見てもらえるのも。だからこそ守るわ、街もみんなも）

正義感の強い聖瑠は、ファンに向けた笑顔の裏で決意を新たにしている。

そのときだった。不意の知らせが届いたのは。

「大変だ、また近くでやつらが出たらしいぞ。今度は女だつてさ！」

駆け込んできたスタッフの言葉に、聖瑠は知らず目を厳しくする。

（女？ まさか……あいつが？）

皆に見えないよう、聖瑠はそつとブレスレットを握った。

「ひい助けてえ、命ばかりはあ！」

その日の深夜。トウキョーシテイの片隅では、再び怪人が人を襲っていた。

逃げ惑うのは仕事帰り風の男。酔った勢いで裏路地に入り込んだらしい。

男は大抵、即惨殺される。怪人が犯すのは女のみだ。

だが今夜は少し事情が違った。怪人らを従える女の姿が一つあったのだ。

「フフ、だめよ。今宵の私は血に飢えているの。それと、牡のエキスにもね」

黒いコスチュームに身を包んだ、妖艶な雰囲気的美女だった。

見た目は20代後半ほど。長い白髪と褐色の肌を持つエキゾチックな容姿をしている。体型は熟れた女のそれで、少し垂れた豊乳や巨尻がどこか淫蕩な雰囲気を出していた。

その衣装もまた実に卑猥だ。軍服を思わせるトップス、ボンデー調のニーハイブーツ、それらは身体にびたりとフィットしボディラインを浮き彫りにしている。しかも肌の大半が露出し、乳首はニブレス、陰部はストング風のわずかな布が覆うのみだった。

言い表すなら色情狂。背には赤い羽根を持つ、悪魔のような好色女だ。

「殺す前にくっぷり搾り取ってあげる。今宵は満月、身体が熱くて疼いて狂いそう。白いエキスを死ぬまで搾り出してあげるわ」

「——そこまでよ、クルス・エロス！」

だが、女の魔手が男を捉えんとしたときである。

高いビルの屋上から、一つの人影が急降下して着地した。

色気の強い豊満な肢体に赤いパワードスーツを纏う女戦士——ブレイズエンジェルその人である。

「ブレイズエンジェル！ 性懲りもなくまた現れたか」

忌々しげなその女を、ブレイズエンジェルはキッと見据える。

「あなたこそ。これで六度目ね。——クルス・エロス。フォールンクルスの筆頭幹部」

対峙する二人の間に独特の緊張感が生まれた。

ブレイズエンジェルとクルス・エロス。二人は敵として幾度も相対してきた。さしものエンジェルもエロス相手には五分の戦いを強いられてきたのだ。

二人の関係はもはや因縁と化した。ある。決着を望む意思が両者の間で膨れあがっていた。

「お前たちは手を出さんじゃないよ。こいつは私がやる」

クルス・エロスは一歩前に出て殺気立つ部下たちを鞭で薙ぎ払う。

「相変わらずいいやらしい身体つきね。今度こそ跪かせて犯してあげるわ」

「やってみるといいわ。因縁の決着

今夜こそつけてみせる！」

得物の剣を構え、ブレイズエンジェルも一歩踏み出す。

睨み合う二人。張り詰めていく周囲の空気。

やがて両者は、同時に地に蹴った。

「アッハハハハ、そおら天使様あ！」

「はあああああつ！」

ブレイズエンジェルが剣で斬りつけ、クルス・エロスが鞭を振るう。両者の得物が高速で触れ合い宙に無数の火花を咲かせる。

その速度は尋常ではなく、いくつもの残像が生まれては消える。全力を出す二人の攻撃は怒涛の勢いで数を増し、拳や蹴りなどがぶつかるたびに衝撃波が広がった。

そして——

「はああああ……くつ、まだ……！」

「ぜえぜえ、ぐつ、エンジェル……！」

「強い……これほどだなんて……」

やはり実力は拮抗していた。最初から全力だったため互いにもうポロポロとなつている。パワードスーツが傷つき、バイザーはひび割れ、裂けた胸や腰の部分から白い肌が露出していた。

荒い呼吸で揺れる豊乳はかすかに桃色を露出させている。それとなく手で隠し、ブレイズエンジェルこと聖瑠は思う。

（けど相手だつてポロポロなのよ。今こそ決着をつけるチャンス……！）

ここで逃がせば因縁は途切れず被害者は増えていく。彼女を倒せば敵の組織にも大きなダメージがいくはず。

今度こそ決める——決意を持って、聖瑠は一直線に飛翔する。

「これでどどめ、奥技、超級炎熱剣！」

「こつちの台詞よ、つあああつ！」
クルス・エロスも真つ直ぐに飛翔してくる。

炎を纏った灼熱の剣と稲妻を帯びた鞭。両者が激突し交錯してすれ違ふ。

一拍の後、女幹部はがつくりとその場に崩れ落ちた。

「フ、フフ、私が……負けた……？」

「クルス・エロス、あなたは強かったわ。でも悪だった。天使の炎に焼かれる運命だったのよ」

聖瑠は歩み寄り、滅びゆく怨敵を静かに見下ろす。

「せめて穏やかに眠りなさい。死は最後の安息。天使は死者を許すものよ」

不思議と高揚も安堵もなかった。あるのはただ、哀れな存在への鎮魂の思のみである。

「フフ、フフ……」

今際の際に、怨敵は小さく笑った。

「完敗よ……さすがね、エンジェル」

「エロス……」

これをあげるわ。勝者の証よ……
そうやって彼女は左手首から何かを外した。震える手でそれを渡してくる。

「ブレスレット？ あなた一体……」

「フフ、ライバルからの贈り物よ……」
彼女はそう言い残して事切れた。灰

色の塵となり風に流されて消える。

残ったのは、手渡された黒いブレスレットただ一つ。

「わたしと同じようなものを……あなたも変身して戦っていたというの？」

聖瑠はブレスレットをじつと見る。

あり得なくはない。現に自分のパワードスーツも同じように機能するのだ。同等の技術が敵方にあってもなんら不思議な話ではない。

（でも、あのエロスがわたしに力をくれるなんて……）

受け取っていいものかどうか、正直なところ迷う。ライバルと言えは聞こえはいいが、馴れ合いの介在する間柄ではなかったのだから。

それに使用可能かどうかとも判然としない。一見同じ装置に見えるが不明な点は数知れない。

ここは様子を見たほうがよさそうね
聖瑠はひとまずそう結論づける。

だが事態は予想外に切迫していた。

「ククク、安心するのはまだ早いぞ、ブレイズエンジェル」
はつとして顔をあげると、いつの間にか周囲を怪人が取り囲んでいた。

「エロス様を倒した力。だがもう力は残っていない。仇を取らせてもらうぞ」

くつ、と聖瑠は歯噛みした。残念ながら敵の言うとおり損耗は激しくスーツもポロポロ。自己修復機能があるものの間に合う状況とは到底思えない。

（どうする？ このまま戦うのは厳しいけど、でも……）

手の中の遺品をチラリと見る。黒く輝くブレスレットは、こんなときにこそ役立つべきアイテムだろう。

だが使用は躊躇われた。先ほどの不安は何一つとして解消しておらず、賭けの要素があまりに大きすぎる。

異形の怪人たちは着実に包囲を狭めてくる。こぼれ落ちそうな乳房を抱いてブレイズエンジェルは後ずさる。

「なにをしているの。早く使いなさい」
「?! その声、エロス？ えつ、ブレスレットから？」

不意に聞こえた声の主は、どうやらブレスレットのようだった。それも脳内に直接語りかけてくるらしい。

「こんなところで負ける気はないんでしよう？ トウキョーを守るといったのは嘘かしら？」

「そんなこと！ だけど……」
「あなたなら使いこなせるはずよ。私を倒してみせたんだもの」

滅んだはずのライバルの声が妙に優しく論じてくる。

「それとも——怖い？ 勇敢なる炎の天使様ともあろうものが」
「……っ」

声には絡みつくような甘さと、形容し難い不気味さがあった。クルス・エロスの声でありながら別人のようでもある——不思議と快い、誘い込むような音色だった。

（どうしよう、本当に平気なの……？）
黒のブレスレットを握り締め、聖瑠は迷う。

スーツはポロポロ、防御力もパワーアシストも十分でない。相手は雑魚にすぎないものの、このまま戦うのはあまりに危険だ。

だが声には危険なおいがあつた。奇妙に快いがゆえに、逆に不安を強く感じた。

「くつ——わたしは！」

「最後まで自分の力で戦う！」
→シーン2 P78へ

「いいわ、力を借りるわ！」
→シーン3 P85へ

【シーン2…敗北の恥辱撮影会】

「わたしは——自分の力で戦うわ！
あなたの手は借りない！」

聖瑠——ブレイズエンジェルは、そ
う吼えて刃こぼれした剣を握った。

（そうよ、これはフォールンクルスの
武器。悪の力を使うなんて正義の天使
として間違ってる！）

折れそうな心を誇りが支えた。

自分は炎の天使ブレイズエンジェル。
今までも、そしてこれからも。

だが——気高い天使の誇りには、残
酷な試練が待っていた。

「ヒビ、どうしたエンジェル、ちっと
も力が乗ってねえぞ？」

「くっ、このお……！」

普段なら容易く切り裂く剣が、巨軀
の前に弾き返される。——パワーアシ
スト不足——、バイザーの裏にそう表
示が出る。

それでもなんとか一匹を貫き、二匹
目を吹っ飛ばし、三匹目もどうにか倒
せたというところで、

「クキキ捕まえターア！」

「くあっ、は、放せっ、ぐああつ！」

複数の怪人にととう取り押さえら
れてしまった。

「放せこのっ、わたしは負けない、こ
んなことでっ、ああつ！」

必死に抵抗を試みるもダメージは深
刻でパワーが足りない。ぶら下げられ
た鶏肉のごとく両腕を掴まれ宙吊りに

されてしまう。

さらに両足を左右にぐっと開かれた。

「これも随分と破れているナァ。さす
がエロス様、狙いどころがいいイ」

「もうちょっとでまんこが見えるゾ。
この布を引き裂こうぜ」

「やめろ、やめろお！」

聖瑠は暴れたがどうにもならず、陰
部をまじまじと覗き込まれる。

「いいにおいダ。極上の牝のにおいダ」

「早く脱がせロ。オレの肉マラを叩き
込んでやル」

「ふざけるな、このっ——ザコが！」

聖瑠は怒りと侮蔑をこめて精一杯睨
みつける。

それが怪人らの反感を買った。

「このザマでまだいうカ、おラッ！」

「舐めやがっテ、おウツッ！ うラア！」

「がはっ、ごふっ……！」

動けないところへ次々と拳が叩き込
まれる。バイザーが、機械部が、次々
と破損していく。

（こんな、こんなザコ連中に……）

ダメージがいよいよ本体に来て苦痛
が意識を遠退かせる。目の奥が霞み感
覚が消えていく。

「待テ、こいつの顔に覚えがあるゾ」
ヘルメットが砕けたところで、ある

怪人の興味深そうな声が聞こえた。

「確かグラドルの——こいつはいいイ。
面白いものが見れるかも知れんゾ」

素顔となった顎がぐいと掴まれて覗
き込まれる。霞んだ目に、豚の顔をし

た怪人のニヤけ顔が映る。

「このまま犯すのもいいガ、こいつに
はもつといい使い道がありそうダ」

臭い吐息を顔に浴びながら、聖瑠は
ついに気を失った。

※

「ようこそミナサン、よくぞお集まり
くださいました！」

ブレイズエンジェル最後の目撃日か
ら、数日が経ったある日のこと。

シテイ中央のあるホールにて、「天
ノ宮聖瑠」会員限定特別撮影会が開催

された。

「こんなときこそ聖瑠ちゃんの手で
癒されようぜ！」

突然のことにファンは戸惑ったが、

そう言っ大勢会場に集まった。エン
ジェル失踪説は徐々に広まりつつあつ

たが、熱心なファンたちにはこちらの
ほうが大事だった。

「こんなに集まっていただけで聖瑠チ
ャンもさぞ悦ぶことでしょう」

司会の男が意味ありげに笑う。

「ですがまずは、スペシャルゲストに
ご登場願いますよう」

「はあ？ 聞いてねーぞそんなの！」
「いいから早く聖瑠ちゃん出せよ！」

熱心なファンたちは当然のように野
次を飛ばした。目当ては聖瑠ただ一人

で自分だけのフォトを作りたくて仕方
ないのだ。

しかし——舞台袖から現れたゲスト
を見た途端、彼らは騒然とした。

「お、おい、あれってブレイズエンジ
エルじゃね？」

「赤いボディスーツを着たスタイル抜
群の謎の女……本当だ、間違いねえ！」

「どうなってんだ一体!？」

客が驚くのも無理はない。スペシャ
ルゲストとは、何と正義のヒロイン、

ブレイズエンジェルその人だったのだ。
その正体は無論謎でメディアに登場

したことなどない。その彼女が呼ばれ
たとあつては注目されて当然だった。

「どうです？ 巷で噂の正義面したヒ
ロインが今日、ミナサンの前で惜しげ

もなくボディを披露してくれませよ」
司会の男が自慢げに言う。

養豚場のおいおいに似たその体臭に顔
をしかめながら、バイザー越しにエン

ジェルは睨みつける。

「くっ、よくもこんなことを考えて……」

「クフフ、ちゃんとやってくれたい
ヨ？ でないとあなたは脱出できても、

この客たちはみんな……」

豚っぽい顔に陰湿なものを浮かべる
司会者。

そう、これはフォールンクルスが
膳立てした催しだった。

あのとき敵に捕まった聖瑠はアジト
に連行された。プレスレットも取り上

げられて無力化されてしまった。
聖瑠は当然、殺されると思った。

だが連中は何を思ったのか、回復を
待つてから撮影会をやると言いつた。

正体を知ったうえで、プレスレットま
で返してくれて。

（一体何のつもりなの？ 見てなさい、
この機会に必ず脱出してみせる。みんな

それは、淫欲に満ちた英雄譚――

姫を返して
もらうぞ！

魔王オ！！

淫鏡の生贄

～魔王の遺せし災い～

漫画 ぱふえ
COMIC







おのれ…

この期に
及んで尚

オレを
拒むのか…



ククク
まあ良い



オレは滅びぬ
からな—

すぐに会いに
戻ってやるぞ



リリアナひ
…め—

かくして
魔王は滅び

平和が訪れた



だがそれも
束の間――

敵襲
!!



あら？
この鎧は…



勇者様たちの
進軍する裏を
かかれたか！
姫は奥に!!

私も戦い
ます！

宝物庫を
開放します
皆も
武装を!!

はッ



ははッ

なんですか？
この鎧の力は…

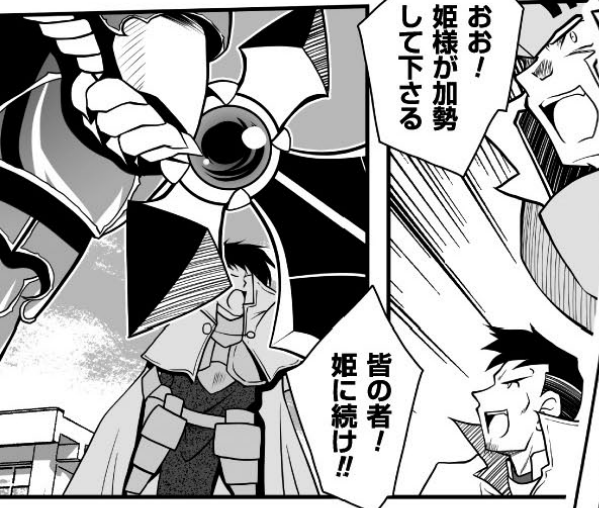
体が軽い

私の動きを先読みして
動くような

いいえ！
むしろ鎧の方が
先に

おお！
姫様が加勢
して下さる

皆の者！
姫に続け！！





魔装スーツの洗脳フォースに
フタナリペーパリスが覚醒するー!

MASQUEFORCE
HILDA
魔装フォース

ヒルダ

屈辱の快樂再洗脳とパティふたなり責め

小説
NOVEL

あらいゆう
新居佑

挿絵
ILLUSTRATION

あおぐう
阿呆宮

二〇二〇年、八月。熱帯夜のうだるような暑さが支配する午前零時を回ったころ。魔都・東京に広がる大歓楽街。そこにそびえるピンク色のネオンサインに囲まれた豪華な屋敷は、諜報部の情報によれば、テロ組織の重要な資金源となっている人身売買とクスリの重要な取引場所であるとのことだった。

「ふっ、どうやら当たりのようだね。武装した兵士たちがうじゃうじゃと……っ！」

屋敷の屋根の上でホバリングする、最新鋭のステルス輸送ヘリから、他の女性隊員たちよりいち早く躍り出た女性——ヒルダ・S・峯崎は、月光に映える長く美しい銀髪を、ローターが起す強風で揺らしながら、艶やかなルーージュを引いた唇をニヤリと、楽しそうに上向かせた。

三年前組織が起こした、大規模同時多発テロによって、東京の中心地である都庁五キロ四方は灰燼に帰した。今の東京は半ば彼らに支配されている。

テロリスト集団が、これほどまでに脅威となっている理由は、組織が独自に開発したインプラント・ソルジャーの存在だ。

法律や人権すら厭わない組織は、集めた兵士たちに機械の身体を与え、その常人をはるかに上回る能力によって、既存の軍隊すら圧倒する力を世に示し続けている。

そんな危険な連中を打倒するために組織されたのが、対テロ特殊チーム、

通称「スペシャル・フォース」であり、ヒルダはそのチームの名実ともにスーパーエースなのだ。

そして彼女たちの今回の任務は、この娼館の主である組織幹部の男の捕縛もしくは抹殺だった。

「お前たちは下がっている。こいつらは私の獲物だ……っ！」

背後の女性隊員たちを手で制すると、ヒルダはその手に長大な対物ライフルを抱えて、無数のソルジャーたちが待ち構えるロビーへと、飛び込んでいく。軍帽に似たデザイン帽子から覗く、鋭い切れ長の目に飛び込んできたのは、外見上は有機的な人間らしい身体をもつが、中身はインプラント化された悪漢たちだ。数は視界に入るだけでざつと二十。

「げへへ、一人だけか？ ばかな女だぜ」

「政府の犬は、きつちり躡けてやらねえとなあ」

たゆまぬ訓練と輝く才能によって、ソルジャーに対抗できる強さを誇る対テロチームの一員といっても、一人だけならそれは犯す対象——そう判断した男たちが、股間から醜い逸物を勃起させながら、ヒルダにいやらしい視線を送る。

「く、ふふっ。やはりなにも変わっていないな。市民のための革命とは名ばかりの下種レイブ魔がっ！ せいぜいあの世で後悔するがいいっ！」

言ったヒルダが、白いマントを翻し

て駆ける。それは人を超えた身体能力を有する男たちを、さらに上回る神業のごとき動きだ。

ニヤリとハンターの笑みを浮かべるヒルダは、大口径の対物ライフルを、伏せ撃ちではなく、腰だめに構えて発射する。

ダアアンツツッ！ ドオオツツッ！

装甲車すら蜂の巣にする重機関銃仕様の弾丸が、セミオートマチックのライフルで、リズムよく発射され、並み居るテロリストたちの身体をミンチのように粉砕していく。

「なっ、なんだ。本当に人間かっ!？」

「こ、こいつまさか昔……ぐぎやあああっつ!」

醜い断末魔がロビー中にこだまする。気づけばわずか数秒の間に、建物内のテロリストたちは、水色の体液を垂れ流す、惨めなガラクタの山と化していた。

「……貴様がターゲットだな」

そう冷たく言い放ったヒルダは、部屋の奥で小便を垂れ流しながら、尻もちをついて震えている小太りの男に、ライフルの銃口を突きつける。

「ひっ、ひいひいっ！ お、お前……っ、ヒルダ少佐。だな!! 一年前に組織を抜けた裏切り者の大幹部っ! へへっ、どうだ。金ならたんまりあるぞ。私を見逃してくれば、こちらに戻る手引きを——」

ドンツツッ!

男が言い終わるより先に、ヒルダの右手が引き金を——ではなく、固い握り拳が男の顔をさらに醜く歪ませる。

「私をその名で呼ぶな、ゲスがっ。お前にはまだ尋問が残っているからな。覚悟しておくがいい」

少佐——それはかつてヒルダが、組織に属していたときの肩書きだ。幼い頃から悪の女幹部になるべく洗脳され、疑うこともなく数々の破壊行為をこなしてきた。

しかし、そんな彼女も、ようやく自分の居場所を見つけることができた。それは偏に——。

「……へへ、あの女のの影響か？ 冷酷無比な少佐が、敵を生け捕りとはな。随分と甘く、そして弱くなったもんだぜ」

「なに………っつ!」

そう言った男の奥歯にキラリと光るもの——爆弾の起爆装置を見つけた。こんな閉鎖空間で自爆を許せば、自分とはともかく、他の隊員たちが危ない。

「チィ………ツツ!」

思わずヒルダは、男めがけて駆けだしていた。男に覆いかぶされば、爆発の威力は軽減される。もちろん自分はまだではすまないだろう。女幹部時代なら、部下を見殺しにしても、この場から退避することを選んだはずだ。しかし、今のヒルダは違う。

「——卑劣な連中ね。けれど、ヒルダには傷ひとつつけさせはしないわっ!」

ホールに響いたのは、悲愴な決意の

ヒルダを打ち抜く爆発音ではなく、一発の銃声。その銃弾は芸術的ともいえる正確さで、男の口の中……起爆装置である奥歯だけを弾き飛ばし、さらに着弾の衝撃で男をも気絶させる。

驚くヒルダの前に現れたのは、銀髪の女将校と同じ白い制服に身を包み、対ソルジャー用の特殊アサルトライフルを持った金髪の美女だった。

「ふん、余計なことを……う、うわ、フロラっつ！ く、あ、んんっつ」

「ヒルダ、大丈夫?! 怪我はない? ああ、本当によかったわ。私の言うことを無視して、一人で突っ込んでっちやうから、心配しちゃったじゃない」

「んくっ、や……やめろ。みだりに抱きつくなどあれほど。まったく、見えての通り無事だ。私があんな連中相手に、かすり傷ひとつ負うものか」

まるで尻尾を振って飼い主にぶつかってくる犬のように、プロンドの美戦士・フロラのふくよかな巨乳を押しつけられ、ヒルダはクールな美貌をカアと、かわいらしい紅色に染める。

「ふふ、照れてる顔、すごくかわいい。……ありがとう、ヒルダ。でも爆発を抑え込もうだなんて、もうあんな無茶はしないだね。あの男を殺さなかったのは、間違いないわ。自信をもって。あなたと私、そしてみんなで、この国の平和を守っていきましょう」

そう屈託なく微笑むフロラは、この特殊チームの隊長であり、その出自は、対テロ部隊のスポンサーでもある

有名財閥の箱入り令嬢だ。

しかしその人一倍強い使命感と多分野に優れた才能から、市民の平和のためにと、自ら率先して部隊設立に尽力。運営の手腕だけでなく、先ほどの神業的なスナイピング技術といい、単純な戦闘力も、女幹部であったヒルダに勝るとも劣らない。

そしてなにより、かつてヒルダと敵同士で対峙した折、その真つすぐな心根をもつて、ヒルダを悪の呪縛から解放してくれた人物でもある。

（初めはただ私をイラつかせる女だと思っていたが……ふんっ、私はお前に会えてよかったぞ、フロラ）

戦闘マシンでしかなかったヒルダに、初めて得られた戦友と思えるただ一人の女性。その柔らかい物腰と、強い光を放つ強靱な意志は、彼女にとつて安心して背中を任せられる存在だ。

「フロラ隊長、ロビーの奥に隠し部屋が。どうやら地下に続いているようです」

「そう。なにか危険なものが保管してあるかもしれないわ。ここは隊長の私が……」

「いいや、フロラは事後処理を頼む。部屋の確認は私がしよう。やつらの悪行はすべて私が叩き潰す」

「そうね、色々、後処理は時間がかかるだろうし……わかったわ。ヒルダでも何か見つけても、下手に手を出したりしないでね。相手は極悪非道なテロリスト。さつきみたいに、あなたに

もしなにかあったら……」

「心配性だな、フロラ。わかっているさ、大丈夫だ。私はお前の部下……いいや、その……親友、なのだから」

そう気恥ずかし気に言った後、ヒルダは一人、隠された地下室へと降りていった。

「ここは……。くっ、悪趣味な……」

足を踏み入れた先の隠し部屋には、この娼館で使うものだったのだろう、数々の淫靡な器具や衣服、それに怪しげなクスリで満たされたアンブルなどが、一面に貯蔵されていた。

フロラに確認するまでもない。腰に帯びた焼夷手榴弾で忌まわしい淫具たちを、この世から葬ってしまおうと考えた、そのとき――。

「ほう、まさかこんなものまで置いてあるとはな……」

ヒルダの目に留まったのは、丁寧に壁に飾ってある一着のコスチュームだった。

妖艶な黒と紫に染められたセクシーなハイレグスーツは、煽情的な見た目とは裏腹に、対刃性や防弾性に非常に優れた希少繊維でできている。内側には装着者の身体能力をナノマシンによって、劇的に向上させる機能も備えている。

鋭利な装具は、このコスチュームが戦闘用に作られたバトルスーツであることを物語っている。そしてこのスーツのかつての装着者は、ほかならぬヒルダ自身だ。

着る者のなくなった今、おそらくは娼館でのイメージプレイにでも使用していたのだろう。

自身が悪の女幹部であった頃を思い出させる艶やかなスーツは、フロラとの出会いを通して、真なる正義に目覚めたヒルダにとって、消し去りたい過去の遺物でしかない。

「随分と甘く、そして弱くなったもんだぜ」

男の言葉が、ふいに思い起こされる。自分が弱くなっただと? そんなことがあるわけない。信頼できる仲間と共に市民を守る――。悪の女幹部という枷を振りきった自分は弱くなってない。

（だがさつき、私は確かにミスを犯した。私はフロラたちを守れない? ……くっ、そんなことは……っ!）

フロラは今のままの自分でいいと言ってくれた。そう信じてはいるが、その確信がほしいという、焦燥にも似た欲求が、クールなヒルダを揺らがせ、突き動かす。

気づいたときには、ヒルダは着ていた軍服を脱ぎ捨て、壁に飾ってあった魔性のスーツを、そのムチリとした女体に装着させていた。

組織から抜けて数カ月経っても、ス

「ツはヒルダの生涯の身体の一部であるかのように、よくなじんだ。媚肉に冷たく伝わる、レーザーにも似た特殊素材の感触が妙になつかしく、かつての冷酷非道だった自分の魂が蘇ってくるかのように、背筋をゾクゾクとした感覚が駆け上る。」

「……フツ、怯えろ、矮小な人間どもよっ！ 我が名はヒルダ少佐！ 理想世界構築のため、我が足下に跪くがいっ！」

目の前に備えられた大きな鏡の前で、両脚をグツと開き、ピツと右手を前方に振りながら、かつての自分がよく言った口上を響かせる。

そのとき感じた衝動は、あの男が言ったように、さっきまでの自分よりも鋭い、戦士の快感をヒルダに思い起こさせるものだった。

（忘れていた感覚だ。たしかに私はあのときのような鋭利な心はなくしてしまったのかも知れないな。しかし

それは組織の洗脳によって植えつけられたものだ。ヒルダの本心は、弱きを助けることを望んでいる。そう気づかされたのだ。

（……私は前とは違う。相手を想い、信じる強さ。それは決して弱さではない、そうだなフローラ）

かつての自分のスーツを着て、改めて実感した今の仲間たちとの強い絆。自分にはもうこんなものは必要ない。決して揺るがぬ強い心で、弱者を守り、

暴虐非道なテロリストたちを倒してみせる。

「くくく、その甘さが命取りだと教えただけだがな、ヒルダ少佐ああっ」
「つつ、壁から声が……お前はまさか!? くつ、なにつつ!? 身体はまさか!? ふつ、ぐうんんつつ！」

ギチギチ、ギチイイツツ!

突然、男の醜い声がヒルダの耳を打った瞬間、装備していたバトルスーツが、より一層ミチミチとヒルダの豊富な女体に食い込む。まるで凶悪な自我を持ったスーツに、装着者である銀髪の女将校が捕食されたかのようにだ。

瞬間、サークレットが妖しく明滅し、キインツツ! という耳障りな音が脳内に響くと、信じられないことに身体が自由が奪われてしまう。

「くつ、なつ……ふううつ、なんだ、この格好は……つつ!!」

ヒルダの鍛え上げながらも、肉厚のエロティックな女体が、スーツの力によって破廉恥極まる体勢を強要される。

冷たい床へ無防備に背中をつけ、刺々しい魔装に彩られたムチムチの美脚を、まるで男を誘うようにグワツと左右に大きくM字に開かされる。対テロ特殊部隊のエースとして、屈辱的なまでに淫らなポーズだ。

「ふははっ、いい格好になったなあヒルダ少佐。裏切り者の牝豚にはお似合いだ」

「その声……貴様、テイマーか!? チツ、クス研究員!」ときに私が……つつ!

下卑た声の主の名は通称テイマー。かつてヒルダを組織の女幹部として洗脳し、育成してきた男だ。彼の歪んだ考えによって、彼女の人生は狂わされた。その恨みは忘れてはいない。しかし……。

「なつ、なぜだ……つつ!? 手が……指が……そ、そこは……つつ!!」

きつい瞳に怒りの炎を燃やし、ヒルダがスーツの束縛から逃れようとするのを、しかしグラマラスな身体は、気高き女戦士に恥辱行為を無理やり強いてくる。

グローブを嵌めた両手が、糸で操られているかのように、開け広げられたヒルダの股間へと伸びる。きつくスーツが食い込んだ魅惑のデルタ地帯に、ほっそりと白い十本の指が、自分も知らない、ねっとりといやらしい動きで這わされていく。

「無駄だ、少佐。そのスーツは私の最高傑作だ。装着者の身体を乗っ取り、完璧な洗脳を施す。装着してしまえば、どんな屈強な戦士も、このとおり……」
「洗脳だ……つつ!! いったい……んふつ、あ、あああつつ!!」

思考がまとまらないうちに、ヒルダの全身にまばゆいばかりの雷が落ちる。物理的な衝撃ではない。指が這いまわる股間、スーツを着込んだボディに、一斉にアリに刺されたかのごとく、チクリとした痛みと、なにかの薬液を大量に注入された感覚が駆ける。瞬間、甘く蕩けんばかりの牝の波動が、ヒル

ダの肉の内側で炸裂した。

「く、ひいううつ。あ、あふうつ……な、なんだこの感覚は……つつ!! ま、まさか媚薬を……つつ。あうつ、ひぐうつつ!!」

クールなヒルダの切れ長の瞳に、いまだかつて経験したことのない牝の衝動が、パチパチと弾ける。

思わずハの字に垂れ落ちそうになる眉を、歯をきつく食いしばってこらえるが、まるで血肉すべてが沸騰したかのような心地よさに、動揺が隠せない。「やはりただの戦闘バカに育てたのは間違いだつたな。フローラとかいう小娘の正義や信念などという、薄っぺらい言葉に惑わされおつて。しかし安心しろ、少佐。今度の再洗脳は、お前に女の快楽を刻むものだ。お前が女である以上決して逃れられぬ牝欲の虜となり、今度こそ我らに忠実な牝奴隷幹部となつてもらおう」

「ふざけるなっ! 私は二度とお前たちの言いなりにはならんっ! くつ、快楽、だど!! あ、はあんっ。やめろ、指を動かす、なあつつ!!」

戦いが日常であったヒルダにとつて、異性との付き合いはもろろん、その豊満すぎるムチムチボディに宿る、女の性欲を意識したことすらなかった。

無敵を誇る戦乙女の純真無垢な十本の指が、妖しいスーツの意志に操られ、媚薬で熟された、魅惑の花弁を左右にぐにいつつ、と押し広げる。
(こ、これが私のアソコ、だど!!) く

っ、熱いっ。奥までジンジンしてっ……っ。ああっ、指が……入っ……くうらんっっ！

ヒルダの細く長い右の中指が、彼女自身の目の前でズブズブ、ヌブウウ……っ、開ききつた陰唇の中へと呑み込まれていく。

刹那、今まで感じたことのない強烈な閃きが、ヒルダの唇から、少女のような甘い吐息を漏らさせる。

クイクイツ、ズリズリイッ！
「あっっ、んんんんっっ！ くひっ、んああああっっ！」

自分の中指の腹が膣内で折れ曲がり、ちようど恥骨の裏側を軽くなでると湧き上がっていた熱い衝動が、鋭く甘い電気ショックへと変わる。敵に見られているのをわかっているのに、思わず腰をビクンツと淫靡に跳ね上げ、自分の声とは思えない甲高い牝の鳴き声を、地下室に響かせてしまう。

「くくく、Gスポットを弄っただけで、軽くイッたか。戦場では無敵の少佐様も、女の弱点を責められると、飼いならされた子猫のようだな」

男の蔑んだ声に合わせるように、Gスポットを発見した指先が、執拗にヒルダの恥辱の性感帯を弄りぬく。

「あっ、んああっ……や、やめろおっ。へ、変になっちゃっ。これ、おしっこ……んふうっっ。ああっ、おしっこ漏れてしま……ああっ！」

まるで電極を繋がれた蛙のように、

女芯からの官能刺激に合わせ、グラマラスな女体が、大股M字開脚のまま、エロティックに跳ね踊る。

まだ美しい処女膜がくつきり残る陰唇からは、初心なヒルダが放尿と勘違いした濃い女蜜の潮が、ジュバァツッ！と本物のおしっこのように噴き出され、プライドの塊である女将校に、自身の浅ましい牝の本性を知らしめる。

「あ、あ……ああ……っ。くうっ、よくも私にこんな恥を……おっっ」
(屈辱なのに、気持ちいいと思っってしまった……っ。悔しいっ、悔しすぎるっ！)

スーツに操られ、女特殊隊員を屈服させるための、強力すぎる媚薬まで投与されたためとはいえ、強化兵士たちを歯牙にもかけない実力を持つ自分が、快楽などで成すすべなく翻弄されるなんて。

(し、しかし負けてたまるか……っ。たしかに身体はスーツに乗っ取られているが、時間さえ稼げれば、必ずフロアが来てくれるはずだ。私の……やっと思つた親友が……っ)
数百倍にも高められた牝絶頂の残照——。余韻というにはあまりに強い快感の引き潮に、淫らに大粒の汗を浮かべせた媚肉を、ブルブルと打ちふるわせながら、ヒルダは強い決意のもとに唇を噛みしめた。

「孤高なヒルダ少佐が、お仲間の助けを期待しているとはな。しかし無駄だ。お前はこれから決して我々を裏切らな

い、牝豚奴隷幹部に心身ともに生まれ変わるのだからなあ」
「くだいぞ、テイマー……っ。はあうっ！ ま、また媚薬を……くほううっ、ま、負けるか。私はこんな快楽などに……いっ」

男の声とともに、紫色のボディスーツ内から、ヒルダの身体に直接、強烈な催淫薬液が投与され、再び脳裏にまばゆい桃色の閃きが落ちる。

魔装スーツに包まれた腋や太ももの付け根、唇にうなじ……。なによりきつく切れ込んだハイレグ周辺からブワツと噴出した、ヒルダの香り立つ淫臭が、薄暗く空気の淀んだ地下室に充滿していく。

(あ、おとおっ。また疼くっ。身体が熱すぎて……っ。く、くそおおっ) かつて見下していた男に、なすすべもなく弄ばれる自分が情けない。身体は地面に寝そべられ、屈辱を一層強くする。

ハイレグスーツを着込んだ腰が、無意識にビクビクと淫靡な上下動を繰り返す。スーツにきつく押さえつけられた勃起乳首が、暴発しそうに熱く気持ちいい。身体を拘束されているのが幸運だと思えるほどだ。もし自由になれば、ほしくないオナニーを晒してしまっそうなくらい、冷徹な最強戦士の肉体は、官能の業火で煮えたぎっている。

「さらに感度を一ケタ上げてやっぞ少佐。辛そうだなあ。そろそろコレが

ほしくなってきたんじゃないのかあ？」
男の声と同時に、部屋に仕掛けられた淫靡なトラップが発動する。ウゾウゾと壁から這い出してきた石油色のスライムが、床に投げ置かれたヒルダの対物ライフルを呑み込んでいく。

数十秒後には、悪を打ち抜く銃身が、巨大で淫靡な擬似男根へと変化してしまった。ヒルダの腕周りほどもある極太肉茎は、ついさつきまで無機物だったとは思えないほど、生々しい血管を無数に浮かび上がらせている。

先端はきつくエラが張り、一際ぶくんと膨れ上がった亀頭からは、媚薬交じりのきつい牡臭と、とろみのついた先走りカウパーがにじみ出ている。

「よ、よくも私の愛銃を……っ。絶対に許さんぞっ」
(な、なんだあのおぞましい……くう、た……っ。遅しいモノは……。ああ、アソコが疼くうっ。な、なぜだ……っ。気分が妙に高まって……っ。ええっ)

口では強気な言葉を発せるのに、巨大な逸物へと変えられてしまったライフルを見せつけられると、イッたばかりの女穴が、再噴火したかのように熱くドロドロの、淫らなかり火を焚いてしまう。

フロアの助けを待つためには、自分から快楽など求めてはいけないとわかっているのに、お預けにされたお菓子を見つめる子供のように、美しい相貌の唇の端から、粘っこい涎がつうと垂れ落ちる。

ヒルダの危険な欲情に呼応して、額の冠の宝玉が妖しい紫色の光を発する。「スーツに取りつけた洗脳装置が効き始めたようだ。お前は正義の戦士などではない。一匹の牝だ。仲間の助けより、マンコにチンポが欲しくてたまらない浅ましい変態女なのだ!」

「う、うるさいっ。く、ああ、ソレに手をかけるなっ。チ、チンポ……チンポライフルをマンコに近づけるな、ああっ!」

脳内に送られる洗脳信号が、お堅いヒルダが決して普段は口にしない、恥辱の淫語を無意識にしゃべらせる。そしてそのいやらしい響きは、甘美な波音となって、ヒルダの欲情を煽っていく。

操られた両手が、まるで男性器にそうするように、愛おしく肉棒ライフルの太い銃身を握り込み、ヒルダの女穴の下、数センチに、猛りきつた毒々しい亀頭をあてがってしまう。

(だ、だめだつ。私は卑しい女ではないっ。堪えろっ。ああっ、だぐる、チンポくるうっ! イケナイものがきてしまうううっ!)

古いページを破り捨て、新しく決して消えない決め事を書き込むように、理性のバリアを剥ぎ取り、直接倫理観を書き換える強力な洗脳波によって、呪われた魔装スーツに女体を縛られた銀髪の女戦士。高鳴る性の衝動を、強い精神で両脚をきつく踏ん張って、どうにか耐えしのごとくする。

しかし、淫靡なスーツから肉体に送られた命令は、経験したことなどあるはずがない、卑猥極まるガン股スタイル。ムチムチと脂ののったエロティックな太ももがゆっくりと沈んでいくたびに、床につき立てられた剛直が、熟した牝果実の中心穴に、ジワジワと呑み込まれていく。

「……あつ、くううっつ」

(ほしいっ。私はこのチンポライフルを挿入してほしいと思っっているっ。ダメだつ。それだけは……っ。この私が、こんなスーツの言いなりなどないっ!)

普通の女性兵士なら、とつくに一匹の牝に堕ちている媚薬量と強力洗脳液に、ヒルダは恐ろしいまでの胆力で、必死の抵抗を見せつける。

いやらしくガニ股に広がりきつた美脚が、ブルブルと淫靡に震え、切れ込みの奥にヌメる牝の穴からは、トロリトロリと、濃い恥辱のラブジュースがこぼれ落ちていく。

だが、決して挿入は許さない。成熟しきつたエロボディを内側から籠絡され、純粹に真つ白な心は、今やピンク色の妖しげな濃霧に包まれている。しかし自身のプライド、そしてフロラとの友情にかけて、銀髪の女戦士は、悪逆非道な洗脳スーツに抗い続ける。

「ふおおおっつ。んくううっつ、くううっ……負けて、なるものか……ああっ!」

投与された媚薬と、いまだ続く快楽洗脳のせいだろう。

ブルブルと震える両脚が、ほんのわずか下がると、信じられないほどに凶悪な太さを持つ雁首が、ハイレグスーツの股間先端にジユクリと触れる。たつたそれだけで、四肢の指先から脳天にいたるまで、膣の無数の肉ヒダを直接、淫茎で抉られたかのような官能電流が、グラマラスなヒルダを蕩けさせていく。

テカついた切れ込みからは、ブシユブシユと卑猥な臭いの愛液が断続的に噴き出され、女戦士が、陥落寸前にまで発情しきっていることは、目に見えて明らかだ。

(フロラ、早く来てくれっ。私はもうあんな組織に戻りたくはないっ。お前と一緒に……。お、ふおおおっつ。ひぐうううっ!)

もういつそ素直にベニスの銃身を受け入れてしまおうかという、弱い牝の本性が、脳裏を支配し、太ももを引き下ろそうとするが、そんな彼女の支えになつているのは、金髪の親友の存在だ。

「ふ……、ふ……っつ」

牝の嗜虐心を誘うような熱い吐息と、眉をハの字に歪めながらも、切れ長の瞳の輝きは失ってはいない。

「こいつは驚いたな。だが強靱な精神力をもつたお前が、その魔装に相応しい快楽の奴隷に堕ちたとき、最強の兵士へと生まれ変わるのだ。ヒルダ少佐あつ!」

ギギイインッツツ!

「つつつ、く、あつっ、く……」

サークレットがより一層激しく輝き、ほんのわずかにヒルダの意志を上回る。必死に押しとどめてきた底なし快楽の扉に、一寸ほどの隙間を穿つ。

微小な穴は、気高い女の防壁に無数のヒビ割れを起こさせ、数秒後には、爆発的な官能の洪水を呼び起こし、銀髪の特校のムチエロボディを沈め尽くす。

股を大きく開いた太ももが、ブルブルと淫らに震えたかと思うと、ガクンッ! とヒルダの腰を真下に突き下ろす。そこには隆々と勃起した牡欲の象徴が待ち構えていた。

チュブツツ……ジュブズブウウツツ!

「そん、な……くおっつ、おとおほおとおおんっつ!」

いまだ男の手に穢されたことのない処女膜が、自らの愛銃を卑猥に改造された擬似男根によって、無残にプチチイイツツ! と引き裂かれていく。

淫通が生む破瓜の痛みがヒルダに自身の女を意識させるより早く、圧倒的な情欲が、彼女の膣内全部を狂つたような快感で、あつという間に染め抜いていく。

「くっつ、あああつつ。入っってくるうっ!? これえっつ、チンポライフルが、私のマ、マンコの奥までええっつ!」

ズブヌチウウツツ!

起立しきつた肉棒に、ねつとりとし

エルフの国の宮廷魔導師になれたので 姫様に性的な悪戯を試してみた

THE COMIC

TOPICS

大ヒット小説『エルフの国』がニジマガに再登場！
宮廷で出会った美エルフたちとのエッチで楽しい
悪戯生活が漫画と小説のダブル掲載！！

本格スタートする時丸佳久先生の漫画版では救世主となり宮廷魔導師に
任命されたキースと、姫・ナイアの出会い＆マッサージプレイを！

小説ではあまり描かれないキースやルーの表情にも注目！？

そして姫のほかにも忘れちゃいけないのがツンデレエルフの女騎士アイシャ。
更衣室での着衣エッチを全ページカラーの完全書き下ろし小説でお送りします！

〔原作〕
磯貝武連
〔漫画〕
時丸佳久
〔キャラクター原案〕
成海クリスティアノート

コミカライズ第二話×特別読み切り小説豪華二本立てなのです!!!

CHARACTERS



アイシャ
ナイアの護衛騎士を務めるデザート・エルフ。正義感が強くお堅い。ナイアが懐くキースのことが心底気に入らない。

ナイア
エルフ領にある小国セイムラッドのお姫様。エルフなのに生まれつき魔法が使えなかった。素直な性格で疑うことを知らない。



キース・ブロックハウンド
『死霊の夜明け団』の元・正魔導師。盗撮が原因でクビになり詐欺師となっていた。攻撃魔術では史上最低と言われたが「ちまちました魔術はお手の物。人呼んで「ちっさい男キース」。

ルー
下位の猫妖精でキースの使い魔。



二次元ドリーム文庫版 / 第2巻も大好評発売中!! (WEBでは読めない書き下ろしシーンも!)

◆『デジタルブレイク』でご購入いただくとさらにもう一章! 番外篇「姫様、ギャルになる」が読める! ◆



製作進行二次元ドリーム文庫の人気タイトルが
ついにコミカライズ化!!

魔導師様…

わたくしは
魔法を使えるように
なりますでしょうか？

ときまるよしひさ
漫画 **時丸佳久**
【原作】 磯貝武蓮
【キャラクター原案】 成海クリスティアノート

エルフの国の宮廷魔導師になれたので
姫様に性的な悪戯を試してみた
THE COMIC
第1話

もちろん
ですとも！

おまかせ
ください

ああ
よかった！

嬉しい！

…では治療を
始めますので

そこへ
横になって
もらえますか？

はい！

あ…

服は脱いで
裸になって
ください

ハイ

裸ですね

裸っ!!?

ここは
セイムラッド

千年以上の歴史を誇る
平和で豊かなエルフの国

この男
キース!

しょうもない
騒動ばかり
起こしてしまう

魔導師界の
問題中年!


そして自分は
ケット・シーの
ルー

今回もご主人が
起こした騒動で


幾度となく
ご主人の命を
救った優秀な
使い魔なのニヤ!

四方八方から
追われるハメに!

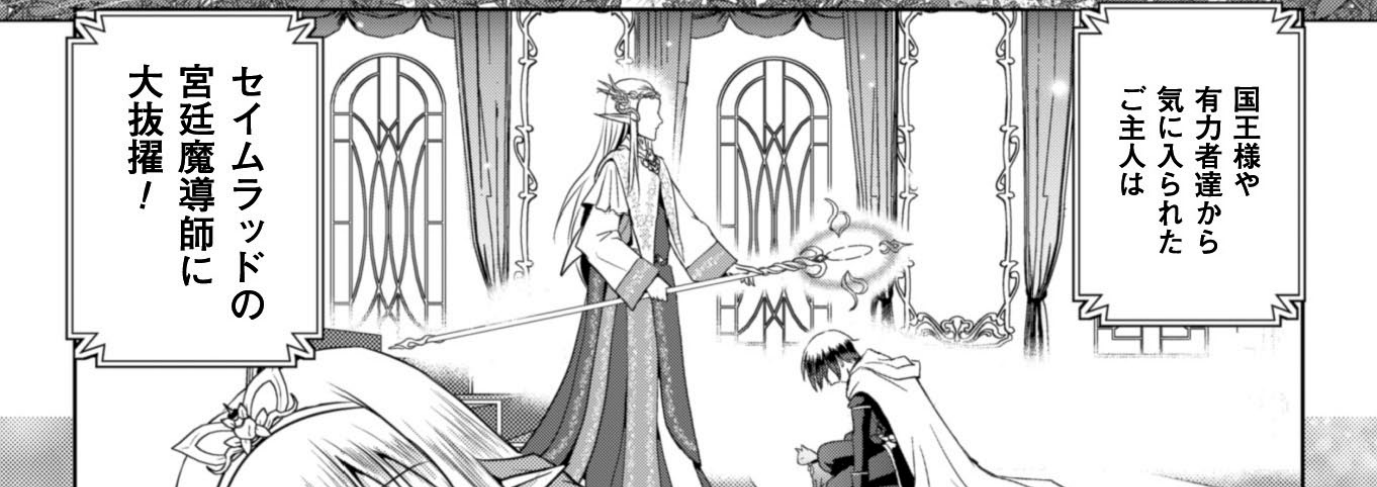




そんな中
ひよんな事から
助けた相手が




エルフの国の
お姫様!



国王様や
有力者達から
気に入られた
ご主人は

セイムラッドの
宮廷魔導師に
大抜擢!



エルフなのに
魔法が全く使えない
お姫様

ナイア様

彼女に魔法を
教えるという
大役を授かったので
ありましたのニヤ!

解説おや



要は
ちよつどいい時に
いのように
使えそうなのが
転がり込んで
来たって話
なんだろうな…

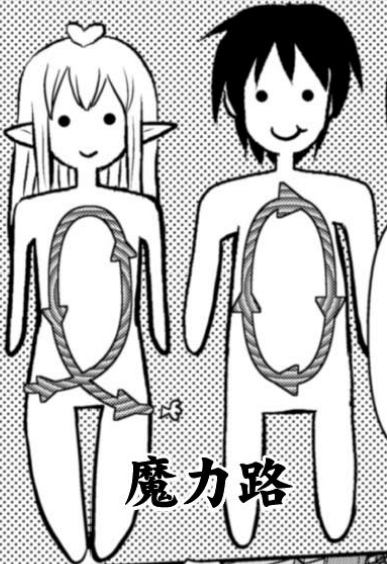
キース様？



あつなんでも
ないですヨ？

—で
昨日も申し上げ
ましたが…

姫様の魔力路は
異常形成されて
おります



魔力路

これを矯正
するためには

裸での治療が
最も効果的
なのですが…

魔力路とは
魔力を体内で
循環させる路みち

ご無理なよう
でしたら…
他の方法を
考えてみます



あ…
いえっ

大丈夫です
やります

その路を
流れる
魔力を
練り上げ
魔術なんかを
発動させるの
ですニヤ！

命の恩人の上に
魔法まで教えて
くださっているのに



わがまを
言つては
いけません…

できましたあ

では
始めましょう！



エルフの国の
宮廷魔導師になれたので

姫様に
性的な悪戯を
してみた

特別備
女騎士、
変な鎧を
着る

鎧から零れる褐色の柔肉！
ちよろインのお股の防御力が♡

W掲載・小説版！
完全独立読み切り篇
原作や漫画版を未読でも
ここから読める！

小説 NOVEL **磯貝武連**

挿絵 ILLUSTRATION **成海クリスティーナ**

その日アイシャは朝から大忙しだった。何せ今日はエルフ領各国の王で長老であるグラスアード国国王ドレイスを国賓として招く日だからだ。

ドレイスは千歳を超えるエルフで、これは貴種エルフとしても異例なほどの長命である。その深い見識と穏やかな性格で、エルフ領だけでなくヒト種の国にも彼を敬拝するものがあるというのだからその人柄が窺えるだろう。

そんな人物をお迎えするのだから、当然歓迎も他国の国賓とは違った扱いになる。マシユアやミア、ナイアはいつものドレスなどではなく貴種エルフの伝統的な衣装を身に纏い、臣下の者達もそれに倣う。そして騎士達に至っては軍服ではなく正式な鎧を着込む事になっていった。

けれど一日それで過ごすわけにはいかず、ナイアの警護任務や宮殿の警備手順の確認などに走り回ったアイシャは、やつとできた僅かな時間で鎧を着なければならなかったのだ。だからこそ小走りで鎧を用意してある小部屋へと急いでいた。

そこは普段は用具室なのだが、アイシャの為に中を掃除して簡易的な更衣室にして貰っていた。

アイシャは預かっていた鍵で錠し中に入ると、昨夜の内にこの部屋へと持ってきていた鎧の覆いを外した。そして「ん!？」と変な声を上げた。

確かに昨日そこに準備しておいた鎧がなくなつて、代わりに変なものが置

いてある。もう一度「んん!!」と変な声を上げたアイシャはその変なもの周りを回って確認する。

それは一見すれば鎧っぽいけど、どう見たって鎧じゃない。何せ肩当てに籠手、そして脚甲はあるが、それ以外の一番大切な胸甲や脊樑パッドそれに腰甲が全部欠けていて代わりにおまけ程度に鍍金されたビキニが置いてあった。「な、なんじゃこりゃ!」

つい往年の名台詞をキメてしまうほど異常な事態にアイシャはその場で右往左往してしまった。何せ大切な鎧が一晩でスケベアーマーに早変わりしていたのだから混乱するのも無理はない。待て待て待て、と冷静に考える。み

すばらしい鎧が妖精の力で一晩寝たら立派な鎧に変つていったという昔話なら知っているが、一晩経つたらエロくなつていたなんて古今東西聞いた事がない。しかしアイシャにはこんな事をする変態妖精に心当たりがあった。

嫌な予感を抱えていると、「どうですか気に入ってくれませんか?」

想像していた下種の声がかかってアイシャは飛び跳ねんばかりに驚いた。「キース! お前どうやってここに!!」

怒鳴りつけるアイシャにキースは平然とした顔で言葉を返した。

「いやあ、アイシャが鎧で警護任務に就くって聞いて、なら俺の出番だろうと思つて頑張つて作つたんですけど:」

「どうですか?」

「どうもこうもない! 何だこれは! こんなものが鎧であつて堪るか!!」

「え、鎧ですよほら、この肩と脚の!」

「そこ以外の防衛能力はどうした!! こんな着るのは騎士じゃなくて痴女だ! 変態だあ!! いいからここに置いてあつた私の鎧を返せ! 早くしろ! 私は忙しいんだつ!!」

これからの詰まりまくっている予定を考えてつい焦つたアイシャは乱暴にそう言つてしまった。するとそれを聞いたキースはムスツとして、

「いやです。そんな怒つてばかりのアイシャには返してあげません」

「な……ふ、ふざけるな! 忙しんだぞ? これから任務があるんだ! 頼むから困らせるような事言うな!」

「本当に嫌です。折角用意した鎧も喜んでくれないで怒鳴るなんて……アイシャはそういうエルフだつたんですね」

忙しい時にこんな冗談かまされて冷静に対処する方が難しいだろう。

本気で殴つてやろうかとも思ったが本物の鎧がこの場がない以上人質を取られているようなものなのでそれも出せず、アイシャは言葉を詰まらせた。

何とかして機嫌を取ろうと、「キース、あのな……こ、これ嬉しいぞ? 嬉しくて……そ、そうだ! 今度夜に着てやる! 着てやるからだから私の鎧を」

「そんな嘘通じませんよ。きつと返し

たらアイシャは俺の事ぶん殴つてこの鎧を粉々にする気です」

よく分かっているじゃないか。アイシャはついそう言いそうになつて口を噤んだ。

「そんな事あるわけ! キースが作つてくれた大切な鎧じゃないか。着るぞ? 絶対だ!! 約束する」

「本当ですか?」

「本当だ!」

「じゃあ今着てみて下さい」

アイシャは苦虫を噛み潰したような顔で吠えた。

「だから今は忙しいんだ! それくらい分かるだろ!! キースだつて宮廷魔導師として」

「俺は立つてるだけですからね。気楽なもんです」

「その気楽さに私を巻き込むなあ!」

もう泣きそうなアイシャだが、このままこうしても話は前に進みそうもない。どうすればいいか分からずに困るアイシャにキースは、

「だから一回だけ! 今一回だけ着てくれたらアイシャの鎧をお返しします約束です! だから一回だけ着てみて下さい。お願いします!」

この提案を飲む以外にアイシャに道は残されていないらしい。

アイシャは溜息をついて。

「もう分かつたあ……着るから絶対返せよ? 約束破つたら殴るからなあ」

覇気のない声でそう言うとキースはやつたーと喜び跳ねた。

SSSS

後ろを向かせたキースに「いいぞ」とムスツとした声をかけてアイシヤは棒立ちになる。その姿を見てキースは神々しさに目を見開いた。

褐色肌に銀髪のデザートエルフが本物のピキニアマーを着込んでそこに立っている。

鍛えられ締まった肉体の腹部を惜しげもなく晒し、乳房と股間は申し訳程度の武装を施したピキニに守られているだけ。にも拘らず肩や腕、脚といった部分だけはちゃんと鎧に守られているというアンバランスさ。

武骨な鎧を纏った手足が女性である部分を強調させる中心線を際立たせて調整していた。しかもそれを身に纏っているのが艶やかな褐色肌が美しいデザートエルフなのだから堪らない。アイシヤの卑猥な姿を見つめ小さく喜びに震えるキースに当のエロ鎧を着た褐色エルフは、

「何だ？ も、文句でもあるのか？」するとそれを聞いたキースがクワツと顔を上げて首を左右に振った。「文句だなんて滅相もない！ あまりのアイシヤの素敵さに気を失いそうになつてたのです！」

「大袈裟に言うな馬鹿！」
「大袈裟なもんですか！ しなやかな肉体に映えるピキニアマー。そして褐色の肌をより一層際立たせる白銀の鎧！ これを見事に着こなせるのは世界広しと言えどアイシヤだけに決まっ

ているじゃありませんか！」

「ふえ？ あ、うう、そ、そうか？」
「そうですね！ ああ、作って本当によかった……心からそう思います」

見惚れるキースの視線と褒め称える言葉に満更でもなくなってしまうアイシヤに追い打ちをかけるように、

「夢……だったんです。こういう鎧を着こなせて……しかもただエッチなだけじゃない、高潔さも失わずにいる本物の騎士に出逢うのが俺の……夢だったんです」
「う……な、なんだそれ、意味わかんない……ぞお」

つまり昔からいつかは堪らない身体つきの女騎士に下品な鎧を着せて一戦お願いしたかったって事である。

けれどそんな下劣な想いは微塵も窺わず、キースはアイシヤという女性をただ褒めた。

「こんなに美しい身体を惜しげもなく見せて、なのに騎士である気高さは全然ゆらがない……アイシヤだけですよ……俺が作ったその鎧をこの世界で着れるのは……いや違うな、俺のアイシヤへの想いがその鎧をここまで完璧に形作らせて」

「もういい！ よせえ!! もう、褒めるの禁止だあ！」
真つ赤な顔で露出部分を隠そうとすアイシヤは、恥ずかしさにモジモジしてしまふ。キースにここまで褒められて、しかもアイシヤだけとか俺のと言われまくと身体が強い抱擁を求

めてしまふ。特にこの素肌が晒されている状況では尚更だ。

すっかりダメになつて居るアイシヤだが、それでも今は拙いのである。今発情するわけにはいかないのだ。

だから首を振つて気を取り直したアイシヤはまだ見惚れているキースに、

「ほ、ほら！ それより着てやったんだ！ 約束通り私の鎧を……」
「ここまで言うキースが近づいてきて、ニッコリと微笑むとアイシヤの身体に触り始めた。

「あ！ こら！ な、なにを」
「いやあ、アイシヤの鎧の着こなしがね、少しなつてないかなあつて。だから俺が完璧に直してあげます」

「直すつて……だから私はこれから任務が……だから忙しくて……きこなしなん……てえ、はう！ きやうう！」

キースの手が無遠慮に素肌の腰や腹部に触れてアイシヤの筋肉を確かめるように撫でてゆく。美しい褐色の素肌にキースの指先がイヤらしい手つきで這い動いていくのだ。そのくすぐつたい気持ちよさにアイシヤは反応しそうになるが必死に抵抗した。

「よせ馬鹿者お！ いい加減にしないと怒るぞ！ やくそく、まもれえ！」
撫で触る指先に徐々に熱くなつてゆく心と身体を、任務だと懸命に言い聞かせて振り払おうとする。

けれど柔らかい指の腹が脇腹を撫で、そのまま臍へと向かい、やがて下腹部のピキニラインをなぞると、

「んあああ！ あ、あんん！ きやうう」

可愛い女の子の声を上げてアイシヤは悶えてしまった。反応に気をよくしたキースは更に卑猥な指遣いで女騎士の身体をなぞり触つた。

薄く浮かんた腹筋やくびれた腰などを丁寧にイヤらしく撫で感度を上げた。

「ああ、こんな鎧の着方して……もつとここはこう」

「はうう！ ひああ！ こ、ら……ばかもの！ そこ、お尻！ 太腿!! 触るなあ！ きやううう！」

指先がピキニラインをなぞりお尻肉を揉み、そして太腿から股間の熱い部分に軽く触れると、アイシヤの反応は大きくなる。そこでキースは触る位置を変え、ピキニの胸を横乳、下乳と押し揉んでいく。アイシヤは快楽に慣らされた身体が鳥肌を立てて気持ちよさに順応して雌の反応をみせていくのを止められなかった。

カチャカチャと鎧を鳴らして膝を震わせるアイシヤにキースは屈み込むと色んな場所にキースをし始めた。

「あ、あ？ ふあああ！ こらあ！ なんて、そこ、キスするなあ！ やめ、ひやううう！ あ、ああああ!!」

臀部や太腿、露出している部分にキースの唇が触れて「ちゅ」と音を立てると、アイシヤはむず痒い気持ちよさに背筋を震わせた。キースがキースをして背筋を震わせた。キースがキースをして背筋を震わせた。その感触がアイシヤの皮膚の唇が当たった部分を熱くさせる。そしてその熱さは身体の奥へと染み込

んでいった。

間違いない濡れ始めた事をアイシャは気づかれないように太腿を閉じようとする。だってそんな事に気づかれたらキースは絶対求めてきてしまう。自分のおまんこを本気で責めたて始めてしまうだろう。

「ああああ！ だめ、だめ！ 考えちゃ……んんっ!!」

責められる事を想像するだけで身体の奥から蜜が溢れ出てきてしまう。

何でこんな優しい責め方を、よりもよってこんな時にしてくるんだとアイシャは泣きそうになった。

もしこれが夜だったら、いや夜じゃなくても普通の時ならちゃんと応えてあげて自分も快楽に溺れてゆけるのに。

「ばか……はうう!! ばかものお! キースのばかあ! うう、あうう!」

声を上げるアイシャの股間がほどよく湿っている事に気づいたキースは驚いた風に声をかけた。

「大変です! 濡れちゃってますよ? これじゃ鎧なんか着れませんねえ」

「え? はえ?」

「しようがない! 俺が一肌脱いで」と言いながらキースはアイシャの身体の前を移動すると、ピキニの股間部分をズラして顔を突っ込んだ。

「キース! こらあ!! やめ、んん! やめろお!! なめる……きやうう! なめちやダメだあ! きもちいのやめろ!! んんああああ!」

強すぎる快楽のせいで上手く動けな

いアイシャは言葉では抵抗しつつも身体はキースに弄ばれたままだった。

甘く開かれた脚の間にある雌器官を舌で舐め擦られ、クリトリスが淡い刺激に反応を始める。そもそも身体中を触られていた時点で軽く勃起していた陰核はキースのザラつく舌の表面に擦られてすぐにピンピンに硬くなった。

大きめのクリ本体が包皮から出てくると、その先端をキースは唾液に塗られた舌でヌロヌロと舐め回してゆく。

陰毛の処理をしてあるアイシャのおまんこは舐めやすく感触もよく、キースは夢中になって舌を動かし続けた。

「あいひや、んちゅ、ちゅ、あいしやのおまんこおいひい……あじがこくつへ、れる、んちゅうう、まじうま」

「う、うるさい! うるさいいい!! そんな、とこ、おいしいわけ……あああ! くはううう!! うううう!」

「でも、どんな蜜が零れて太腿に垂れちゃって……アイシャほら、もつと腰を落として脚を広げないと!」

「されるがままに脚を開かれ、後ろの壁に背をもたれかけて腰を突き出したアイシャは、まるで立ちションをするような格好になった。

「あ、やだ! この格好やだぞお!! やめろキース! 離せえ!! はうあああ! あ、あううああああ!!」

恥ずかしさに抵抗を見せるも、その立ちションポーズのまま本格的なクンニをされたアイシャは気持ちよさにキ

ースの頭を挿んでしまう。

まるで自分からキースの顔を股間に押しつけ、激しいクンニを求めているような格好になったアイシャにキースは強烈な舌遣いで応えた。

はみ出た陰ピラをレロレロと弾き舐め、口で吸い込んで引つ張り伸ばす。そうしてから中に侵入させおまんこ粘膜を擦り舐めた。

膣前庭や尿道口、そして膣口にキースの蠢く舌が擦り当たり続けるとアイシャは気持ちよくてどうでもよくなってきた。このままキースにずっと舐められていたい。そして熱い肉棒を濡れきった中に挿入して欲しい。それしか考えられなくなる。

ダメだと言いつつも聞かせる思いが膣口から中に舌を押し込まれそうになると消えていくのを感じたアイシャだったが、「アイシャ様いらつしやいますか?」

その時扉がノックされて同時に外から声がかかり一気に正気に戻った。戻るところか心臓が止まるかと思った。

それは侍女のベルナの声だった。ベルナはいつもの淡々として声で中にアイシャがいるかどうか確かめる。

うっかり入室する時に鍵をかけた忘れていた事を思い出したアイシャはベルナがドアノブをゆつくり回し中を覗こうとすると慌てて止めて顔を出した。

「べ、ベルナ! どうした? 何か用事か?」

必死で表情を作り、平静を装って卑猥な鎧を身に纏った身体は見せないよ

う気をつけて顔だけ覗かせ対応する。

扉の隙間から明らかに焦った様子のアイシャが顔だけ出して対応してくるのでベルナは不審がりがらも、「あの、そろそろお迎えの時間なのですが、アイシャ様がおいでにならないので」

「そ、そうか、鎧を着るのに手間取ってな、今行こうとほお!!」

「とほお?」

首を傾げるベルナにブルブル震えたアイシャは涙目で微笑み返す。

「なんでもお! ないぞおお! んひい!! あ、あうううむ!」

唸っているアイシャにいつもは無表情なベルナも少しだけ変な顔になる。

「あの……どこか具合が悪いのでは」「しょ、んなこと、ないぞお? へ、へいきだあああああ」

全然平気じゃないアイシャはそう言

ってドアノブを必死に握り締めた。ただでさえ敏感になっている部分が緊張とパレるかもしれないという恐怖に更に切な過ぎるようになっていた。

そこをキースは後ろからクロッチ部分をずらし、切なさに濡れたおまんこ穴に舌を挿し込んでいた。可愛く濡れうねる膣壁を舌で広げるように舐め、膣口付近の肉を柔軟にさせておく。

間違いない肉棒を挿入する為のほぐし方は、奥から蜜を呼び出しアイシャの中身をぐちゃぐちゃに濡らしてゆく。

おちんぼが欲しいという状態に身体を無理やり持つて行かれ、それでもべ



威勢よく
吼えてた
ではないか

さっきまで



ふん
どうした

美しくも憎い女を魔装で墮とす!



これに
懲りたら二度と
脱走など...



...ふっ
気絶して
聞いていないか

女看守の痴女奉仕

くすのき
漫画 COMIC 楠木りん



しかしお前の
看守長としての
日々ももうすぐ
終わりだ!



いつも
こき使いやがって
このクン女!



おい!
こいつを
片付けて
おけ!

...はっ

フン…

毎日
クソ虫どもの顔
ばっかり見て
うんざりする

…ベイリー様

先ほどの男の
手当てが
終わりました

手当てだと!?

バカかお前は
余計な事をするな

まったく
使えない
男だな!

も…
申し訳
ございません

まあいい
さっさと
仕事に戻れ
クズが!

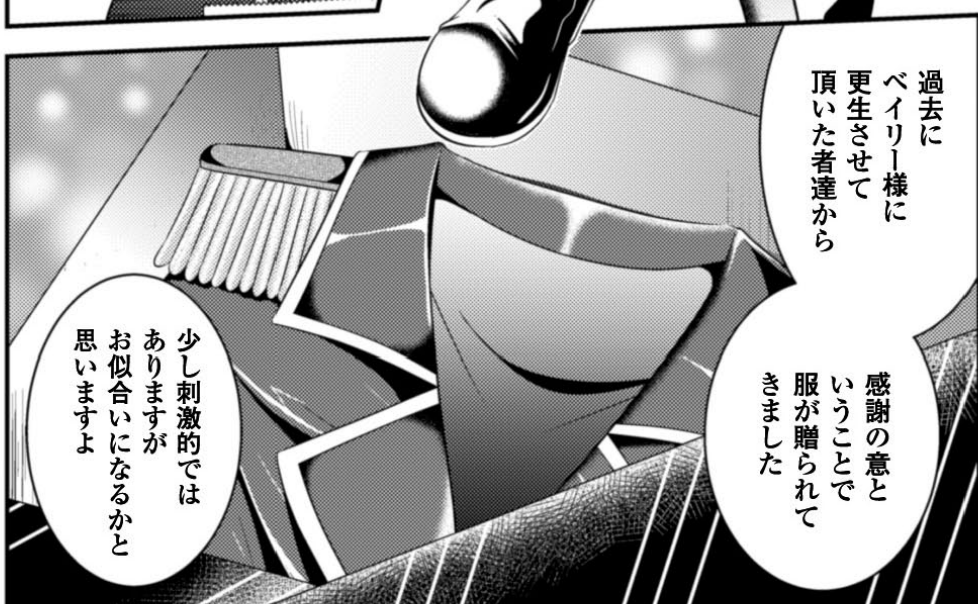
ああの
実はですね…

ベイリー様に
届け物が
ありまして
私に?

過去に
ベイリー様に
更生させて
頂いた者達から

感謝の意と
いうことで
服が贈られて
きました

少し刺激的では
ありますが
お似合いになるかと
思いますよ



せめてジャケット
だけでもお着替えに
なってみては？

どうせ
ロクでもない
素材なんだろう？
こんな…

…肌触りが
良いな

しっとりとして
身体にフィット
するようだ…

それは
ようござい
ました!!

私は外へ
出て
おきますので

ぜひゆつくり
お着替え
下さい

…考えてみれば

たまには
衣装を変えて

気分を違えて
みるのも
良いかもな

不思議だ

この衣装に
着替えただけで…

体中を優しく
あん摩されて
いるような
感じがする…

そして妙に
暖かくて
不思議な匂いだ…

ベイリー様
お似合いですぞ！

なんだか
身体が軽い
感じもする

それは良かった
それでは見回りに
参りましょうか？
私も同行いたします

そうか？
クソ虫どもにしては
センスが良かったな

いつもは
私があると
皆壁際へと
逃げるのに…

貴様ら
全員扉の前に
並べ!!

何だ…？

何だ今日の
こいつらは!?



罪人どもが！
何をニヤついて
いる！！

やはり
クソ虫どもは
反省する脳を
持ち合わせて
ないと見える



よく…

どうしたと
いうのだ…

きゅん



看守様
どうしました？
顔が赤い
ですよ？

妙に
気になって…



貴様！
発言は許可
してないぞ！

いやあ、
今日はそんな
娼婦みたいな
格好してる
からさあ…



お前たちは
明日には死ぬ
その覚悟を
よく…

コイツ…
こんなに胸板
厚かったか？

キラ

あいつは…
なんだ？

股間が随分
膨らんでる

正義のヒロインを墮とす
触手鎧の快樂地獄！

魔装少女
ヒトツバ

~触手スーツに墮ちる正義のヒロイン~

小説 / ウナル 挿絵 / あきのしん
NOVEL ILLUSTRATION

迫りくる黒い影に追われ、人々は恐慌の悲鳴を上げて逃げ惑う。

拳銃の弾丸すら弾き返し、侵攻してくる黒服の戦闘員。その軍勢に警官の顔も引き攣り悲鳴を上げる。

世界を支配せんとする悪の秘密結社「ダークネスムーン」。

その驚異の科学力の前に軍隊すら敗走し、もはや地球は彼らの手に落ちてしまいかと思われた。

だが闇あるところに光あり。世界に正義は尽きていなかったのだ。

「そこまでよ！」

突如響いた声に戦闘員たちが浮足立つ。そしてビルの上立つ一人の人影に気づいた。

「聖装少女ヒナタ参上！ 平和を乱す悪の組織ダークネスムーン！ 私はお前たちの悪事を許しはしない！」

黄金を流したような艶やかなツインテール。絵に描かれたような白い肌。白黒のスーツは正義の証。スーツのプロテクターでも隠しきれない豊満と腰のラインを晒しながら少女はポーズを決めた。

「ヒナタちゃんだ！ ヒナタちゃんが来てくれた！」

人々の空気が一転する。失意と絶望に塗れていた人々の顔に希望の光が灯りだす。歓喜の声に後押しされヒナタは拳を握り締めた。

「たあああああ！」
60メートルの高層ビルから少女が飛

ぶ。長い足に蹴り飛ばされ、数人の戦闘員がドミノ倒しに蹴り倒された。

聖装。天才科学者と名高い市松真昼博士が開発した特製のスーツである。

彼の娘、市松日向にしか適合しないという欠点こそあるものの、その力はまさにフィクションの中のスーパーヒーローだ。

「みんなもう大丈夫だよ！」
敗走するダークネスムーンにヒナタは一転、優しい笑顔で微笑んだ。その声に逃げ惑っていた人々はおるか警官すらも歓声を上げる。

（これが私の守ったもの！）
感謝の表情を浮かべる大人。安堵の表情になる子供。幼少期に見たテレビヒーローそのものの光景。辛い戦いであつても人々の笑顔を見ればヒナタの胸に熱いものが灯るのだ。

「おっと、みんなごめんね！ もう行かなくっちゃ！」
スーツから聞こえたコール音にヒナタは人々の垣根から脱出する。名残惜しさはあるが次の任務かもしれない。ヒナタは一跳びでビルを駆け昇り、通信機に応答する。

「こちらヒナタ！ なに、お父さん？」
「市松日向だな。真昼は預かった」

聞こえて来た声は父のものではなかった。頭の前から指先までをねぶるような、嫌悪感をかき立てる声だ。

「……あなたは誰？」
「君の敵だよ。ドクター影月と言え

わかるかな？」
「か、影月ですって!？」
ダークネスムーンの指導者にして、狂気の天才科学者。今まで追いかけてきた全ての元凶の登場にヒナタは唾を飲み込んだ。

「ヒナタ。これから言う場所に一人で来い。来なければ父親の命はない」
「っ!? そんなことしてみなさい！ 絶対に許さないわよ！」
強気な言葉を使うものの、ヒナタの声は上擦っていた。幼い頃に母を失くして以降、父の真昼はヒナタの唯一の肉親だ。そんな父が危機に瀕して冷静でいられるはずがなかった。

通信の切られる音もどかしく、ビルの屋上から駆け出した。

「よく来たな聖装少女ヒナタよ」
「影月！ お父さんを離さない！」
指定された郊外の採掘所には戦闘員たちが群れを成して待ち構えていた。

戦闘員たちの向こう側にある小高い丘の上には白衣が立っている。枯れ木から削り出したような痩せた顔に色素の抜けたボサボサの髪。一見すると老人のような印象を受けるのに、そのくせ眼だけはギラギラと輝いている。そしてその傍に戦闘員に銃を突きつけられているのは間違いないヒナタの父、真昼博士だった。

「来るなヒナタ！ これは罠だ！ わ、私のことなど構わず！ ぐっ！」
銃底で殴られ、真昼の頭部から赤い雫が流れる。その色にヒナタの顔から

血の気が引いていく。
「や、やめなさい！ お父さんに手を出したら許さないわよ！」
「くくっ。その他人を思いやる気持ち、よく似ているな。君の母に」

「お、お母さん？ なんであなたがお母さんのことを知っているの？」
「知っているとも。私と君の母、そしてその真昼は幼なじみだったのさ。そして私は彼女に惹かれていた。美しく力強く、裏表のない真っ直ぐな心を持った彼女に。だが——」

穏やかな表情が一転、影月は目尻を釣り上げ、真昼の顔を蹴り飛ばす。
「こいつは私から彼女をかすめ取ったんだよ！ そして彼女を殺した！ 私ならば彼女を病から救うこともできたというのに！」
狂ったように真昼に靴底をぶつける影月。そのたびに真昼の顔が泥で汚れ、赤い傷が増えていく。

「わ、私とて最善は尽くした！ それにあの人が苦しんでいた時にお前は一体どこに居たんだ影月！」
「黙れ！ その顔踏み潰してやる！」
「やめてっ！ お父さんが死んじやう！ 用があるのは私でしょ！」
ヒナタの声に影月は動きを止めた。再び顔を上げた時、その顔は穏やかな薄ら笑みへと戻っていた。

「——そうだったな。ヒナタ。君にはこのスーツを着て貰う」
影月が指を鳴らすとヒナタの目の前に黒い宝石が現れた。悪意を煮詰めた

ような禍々しきで宙に浮かびながらヒナタの顔をその表面に映している。

「先に言っておくがそのスーツには特殊な仕掛けがしてある。もしかすると君の精神も壊されてしまうかもな」

「な、なによそれ！」

「なに。君には正義の心やら親子の絆やらあるのだろうか？ 私のスーツなどには負けないさ。それとも自信がないかね？」

挑発的な響きにヒナタはキツと眉を釣り上げた。

「だめだヒナタ！ 私のことなど構わずにコイツを倒すんだ……ぐっ！」

黙れと言わんばかりに後頭部を踏みつけられる真昼。その姿にヒナタの心は決まった。

「約束しなさい！ お父さんを解放するって！」

「もちろんだとも。君がここまで来れたなら、ね」

ヒナタは変身を解除する。元の制服姿へと戻りその指先を黒の寶石に伸ばした瞬間、全身が光に包まれた。

「な、なによこれ！」

光が収束した後、ヒナタの姿はすっかり様変わりしていた。

下半身はまるでハイレグ水着のような大胆なスリットが入っており、鼠蹊部や太ももはおろか大陰唇の端まで晒されている。背中も大きく開き、形の良い肩甲骨からお尻の割れ目まで丸見えだ。それとは対照的に手足は黒いアーマーによって厚く守られているのが、

刺々しい装甲の外観は肌の色と見事なコントラストを描き、逆に露出部分を際立たせてしまっている。

「どうした？ ここまで来なければ真昼は解放されないぞ？」

恥じらいに赤面するヒナタ。そんな彼女を眺るように影月の声が飛ぶ。

「わ、わかつているわよ！」

目の前に立ちちはだかる戦闘員たち。そんな彼らに向かってヒナタは足を踏み込んだ。

「つな、なに!? このスピード！」

いつも通りに足を踏み込んだつもりだったが、普段の何倍もの速度で戦闘員たちに身体が迫る。慌てて拳を突き出せば、まるで紙切れでも飛ばすように敵が吹き飛んだ。

「す、すごい！ これ、お父さんのよりもずっと強い！」

面白いように倒れていく戦闘員たちにヒナタの心はざわついた。

「こ、これなら——っ！」

「もう、お父さんの弱つちいスーツなんかいらんよな」

突然、自分の声が脳裏に響いた。

「——え？ ち、違う！ 私はそんなこと思っていない！」

慌てて否定するも、一度波立たされた心はすぐには落ち着かない。

「どうした？ 動きが止まったぞ」

影月の声にヒナタは慌てて構えを取り直す。脳裏に響くその声こそ精神を蝕む洗脳装置であることなどヒナタの想像の埒外であった。

「くっ！ たああああああっ！」

心のざわめきを振り切るようにヒナタは足を踏み込んだ。すると腰から大きな翼が広がった。血を塗り固めたかのように赤い飛膜は、伝説のドラゴンを連想させる。それがヒナタの身体を空へと舞い上がらせる。

「そ、空まで飛べるんだ」

昂揚感に驚きつつ、ヒナタは丘の上に降り立った。そんな彼女に影月は乾いた拍手をしてみせる。

「驚いたよヒナタ。まさかここまで来るとはね。ふふっ、私のスーツの性能はどうだったかね？」

「っ!? どうでもいいでしょう！ お父さんを返しなさい！」

痴女じみた姿で指を突きつけるヒナタ。そんな彼女を見開かれた影月の瞳が見つめていた。

「本当に母の生き写しのようだ。この男の血が半分流れているなど信じられない。決めた。君は私の物にするでしょう」

生理的嫌悪をわき起こす影月の声にヒナタの背筋が総毛立つ。

「な、何言ってるの！ 変態変態！ あんたなんかすぐに倒して——」

「じゅるん！ にゅじゅちゅうっ！

瞬間、スーツが突然波打ったかと思うと全身を肌を撫でられるかのような刺激がヒナタを襲った。

「ひっ！ な、何これえ！ な、中で無数の産毛で撫でられるかのような

こそばゆい感覚。スーツ自体が変化しているのか、身体をくねらせてもその刺激から逃れることができない。

「くふっ！ んっ！ 止め、止めて！ こ、こんなの！ や、やあっ！」

こそばゆきは次第に別の感覚へと変化していく。指の間から太もも、腋から首までを余す所なく撫でられているうちに、ヒナタの腰がピクピクッと跳ね上がる。

「ふふっ。楽しんで貰えているようだね。だが、ここから本番だよ」

影月が指を鳴らした瞬間、スーツの胸と股間部が一樣に波打ち始めた。内側に伸びた繊毛が敏感な秘部目がけて近づいているのだ。

「な、なにこれ！ だ、だめ！ そんなとこ撫でちゃ！ ふひっ!?」

まるで車の洗車のように繊毛が回転しながら乳房を包み込む。同時に陰唇周りのスーツも変化し、深海生物じみた触手が伸びてピンクの肉を撫で始めていた。

しゅっしゅっしゅっしゅぶ！

滑らかな刷毛が乳房をかすめ、遂に乳首まで到達する。それほど強烈ではない刺激。しかし無視することもできない快楽が胸の先に蓄積していく。やがてヒナタの乳首は木苺のように硬く勃起し、スーツ越しにもぷっくりとした突起が目に見えた。

「ちゅっ！ くちゅっ！ ちゅぶっ！

秘部に伸びた触手はヌルヌルとした粘液を分泌しながら中央の膣口を目指

していた。その液体が粘膜に触れた瞬間、皮膚が火を点けられたように熱くなる。ぬるりと溢れ出す愛の蜜。それを表面に塗りたくりながら触手が割れ目を何度も撫でる。

「どうだい。気持ちいいかな？」

「き、気持ちよくなんか！」

「ああ……とつても気持ちいい……」

再び脳裏に響く自身の声。自分でも出したことのないような甘い官能の声にヒナタは目を白黒させる。

（ち、ちが！ こんなので気持ちよくなってるはず——はひいっ！）

本当に欲しいところを責めず、ひたすらに快感を焦らす触手快感。いつしかヒナタは地面に転がり、腰を跳ね上げていた。

「ひ、卑怯よ！ こ、こんなやり方！ せ、正々堂々戦いなさ……はくっ！ んはあああああああああ♥」

ぬちゅっ！ ずちゅっ！ ぬちゅっ！

抗議の声を上げる口はあつという間に嬌声を奏でるエロ唇に変えられた。

「くっくっ！ よく見ている真昼！ 自分の娘の生アクメをな！」

「や、やめろ！ 影月い！」

「だ、だめえ！ 見ないで！ 見ないでお父さんっ！」

十分に発情させたと見てか、スーツの責めはオーガズムに導く激しいものと変わっていた。

ピンピンに勃起した乳首に触手が絡みつく。陰核にも渦を巻くように触手が巻きつき、充血したクリをさらに真

つ赤にさせる。

「うう！ くうっ！ はぐううう！」

「いじらしい努力だな。それがいつまで持つかな」

必死に手で口を押さえ、胎児のようにヒナタは身体を丸めた。しかし触手の責め苦は過激さを増し、遂に膣口内部へと滑り込んだ。

「——あ、そこだめ！ だめだめだめだめえええええあああああつ！」

ぐちゅっちゅっちゅちゅちゅっ！

つぶつとした感触と共に指すら入れたことのない身体の奥に触手が入り込んできた。最初は絹糸ほどの太さの触手が一本だけだったのに、それをきつかけに次々と入り込み、餌を貪る鯉のように無数の触手が膣内をかき混ぜ始めた。人の指では絶対に再現できないランダムな動き。一本一本がバラバラに動きながらも、的確に性感帯を狙い澄ます。

「頼む影月！ 止めてくれええ！」

「そうやって喚くことしかできないとは無様だな。ほら、娘のほうはもう返事もできないようだぞ？」

「はっ！ はひっ！ な、中、いじらないでえ……っ！」

腰が抜けるような快感から逃げるように、ヒナタはぐつと尻を突き出して地面に四つん這いになった。だがそれを受けすぐに触手も責める角度を変えて快感を途切れさせない。ヒナタはもはや真昼も影月も見ておらず、快感に悶えて扇情的なダンスを踊ることしか

できなかった。

「き、来ちやうう！ 何か、く、来るうううううううっ！」

ヒナタの意識を完全に無視して、腰が跳ね上がる。視界が明滅する。ヒナタの知らない衝動が理性を押しつけ溢れ出る。

「あ、あ、あ、ああああああつ！」

ぶしっ！ ぶしやああああああつ！

一際大きな声が上がった時、ヒナタの股間から透明な飛沫が飛び散った。むわつと辺りに磯に似た据えた雌の香りが広がった。

ヒナタの人生初の絶頂。

それを起こしたのは愛しい恋人でも、将来を誓った夫でもなく、無機物なスーツ触手だった。

「ふむ。初めての触手責めで潮まで吹くとは。どうやら感度は相当にいいようだな。これは楽しみだ」

心底嬉しそうに顔を歪ませ、影月は指を鳴らす。待機していた戦闘員たちがヒナタの両脇を抱え持ち上げた。

「やつ、やああ……は、離しえ……離しやないといひ、酷いわよ……」

呂律の回らない舌で抵抗の声を上げても、ビクビクと腰を前後に振るようでは説得力の欠片もない。真昼を蹴り転がし、影月はその頭を踏みつける。

「ぐっ！ 影月いっ！」

「さらばだ真昼。娘が私に奪われる様を想像しながら股間を膨らませがいい。はははははははっ！」

影月の高笑いと共にダークネスムー

ンたちは姿を消していく。

後に残されたのは最愛の娘を奪われた博士の無様なむせび泣きだけだった。

◆

目覚めた時、ヒナタの視点ははずいぶん高い位置にあつた。揺れる視界と共に鎖の鈍い音が響く。

（ここは？ 私、吊るされているの？）

狭い部屋の中には窓一つない。その中で、ヒナタはあのスーツを着せられたまま天井から鎖で吊るされていた。

「目が覚めたようだなヒナタ」

「か、影月!? そうだ私っ！」

部屋の扉から入ってきた影月の姿にぼやけていた記憶が定まりだす。父を誘拐されスーツを着せられたこと。そのスーツによって恥辱の責めを受けたこと。そして動けない身体のまま彼らに連れ攫われたこと。

（わ、私なんてこと！ そ、それにお父さんは？ 無事、だよな？）

「思い出したようだなヒナタ。あの時の君の顔は実によかったよ」

舐めるような影月の視線を真正面から睨み返し、ヒナタが腕を拘束する手枷に力を込めた。

「こ、この変態！ すぐにこんな鎖千切って！」

「無駄だよ。そのスーツの力は私の制御下にある。だからほら、こんなこともできる」

「ひあつ！ む、胸がっ！」

グッパアツ!

スーツが震えたかと思うと、胸先の生地が一気に穴を開けた。豊満の頂点にある桜色の粒。ぶつくりと膨らんだ桜の乳頭をまじと観察され、今まで以上の恥辱に首を目一杯逸らす。「ほほう。こんなに乳首を硬くして。余程スーツを気に入ってくれたようだな。さて、こちらはどうかかな?」

「っ?! だ、だめええええ!」

影月が腰を下ろし股間に顔を近づける。その瞬間、乳首と同じように股間部の布地が開き、隠されていた秘所が露わになってしまふ。

「ははっ! ぐしよぐしよじやないか! 濡らしたハンカチみたいだぞ!」

「~~~~~っ!」

薄い金色の毛に囲まれたピンクの割れ目。ぶつくりとした恥肉の土手に囲まれたそこからは、透明な水が泉のように湧き出ている。

「この具合なら誰にも身体は許してないようだが、見ておくか」

「はひっ!」

くちゅっ。

両親指で広げられたマン肉はまるでハートマークのようだった。その中心蜜の溢れ出る穴の奥を影月は覗き見る。未だ穢されていない半透明の膜、それを確認して影月は大きく頷いた。「ヒナタ。私に従え」

「……え?」

「恭順し、私のために尽くすんだ。お

前はあの男に騙されているだけだ。私の妻となり娘となれ。そうすれば今までのない最高の快悦を与えてやるぞ」

恐怖に胃がぎゅんと縮み上がる。影月の科学力も発想力もヒナタの想像をとつくに超えていた。着せられているスーツにもどんな仕掛けがあるかわからない。

(でも、私は)

スーツを纏い出撃する自分を父が申し訳なさそうに見ているのをヒナタは知っている。そして戦いの末に見る人々の涙を知っている。

「——お前なんか、大っ嫌いだ!」

絶対に声を上げないとヒナタは心に決めた。影月が望むのは無様に喘ぐ自分の姿だ。そんなのもう二度と見せたくない父と世界に誓う。

「ならば仕方ないな」

「っ! ~~~~~っ!」

にゅちゅにゅちゅぬちゅあつ!

影月が指を鳴らした瞬間、再びスーツが触手へと変化した。無残に晒される乳首と秘所に向け、餌を食るように襲いかかる。

(こ、これ! 前のよりも激しい!)

剥き出しにされた乳首に絡みつく色とりどりの絨毛が、勃起した乳首を取り囲んでその先端を押しつける。

「い、いっつっつっつ!」

ぬちゅっ! にゅちゅっ!

さらに分かれた触手が刷毛のように形を変え、ヒナタの膨らみに乳白色の粘液を広げていた。痛みはない。むしろ

ろくすぐつたいような心地よさがある。乳頭への強い責めと刷毛による柔らかな愛撫。二つの刺激が混じり合い、ヒナタの神経を混乱させていく。

「先程のはほんの小手調べ。これから本当の触手調教だ。気張るんだぞヒナタ。壊れてしまつては面白くない」

それだけ言い残し、影月は部屋から出ていった。

(あ、熱いつ! な、なにこれっ!?)

スーツが分泌する粘液。それは影月が開発した強烈な媚薬だった。一塗りすれば全身が発情し、二塗りすれば三日は疼きが止まらず、三塗りすれば全身に快感が染みついてそれ以外を考えられなくなってしまう。

「はっはひっ! ほっ! おほっ!」

全身が燃えるような感覚に包まれる。痛みは消え去り、空気の震えさえ快感に変換されてしまう。目の前がチカチカと明滅し、鼻の下を伸ばしてアホみたいな呼吸を漏らしてしまう。

(なにこれ! か、身体おかしい!)

私の身体どうなつちやつたの!

高熱が身体中に広がっていく。噴き出る汗はスーツの中で媚薬と混ざつてヌルヌルのローションとなつていた。

「っ?! だ、だめえええ!」

無言の誓いを破つてしまったのは、股間に迫る触手たちを見てしまったからだ。それらも刷毛のように形を変え、ねっとりとした雫をこれでもかと先端から垂らしている。

そこに塗られたら終わりだ。理屈で

はなく、本能でそう察した。胸だけでこんなにも身体が感じてしまつて居るのだ。もしも最も敏感な部位に塗られてしまつたら。

「んぐああああああああつ!」

べちゃああつ!

床に垂れ落ちるほどの媚薬を塗られたらヒナタは目を剥いた。ドクンと跳ね上がる鼓動。高鳴る心臓が媚薬を身体中に拡散させる。

せり上がる快感の頂。それを唇を噛んで必死に押し殺す。

「なんで我慢するの? 素直に気持ちよくなつちやえはいいのに!」

脳裏に響くもう一人の自分の声。まるで責めるようなその響きにヒナタは歯を食いしばりながら反論する。

(だって! 気持ちよくなつたら負けちゃう! 負けちゃうからあつ!)

「負けていいじゃない。だってこんなに気持ちいいんだよ? それが悪いことのはずがないじゃない!」

(でも! これは影月の罠で! はひいっ!?)

そ、そこは違うよお!

ヒナタの臀部は丸く穴を開け、愛らしい窄まりを晒されていた。綺麗な皺を媚薬触手が撫でる。

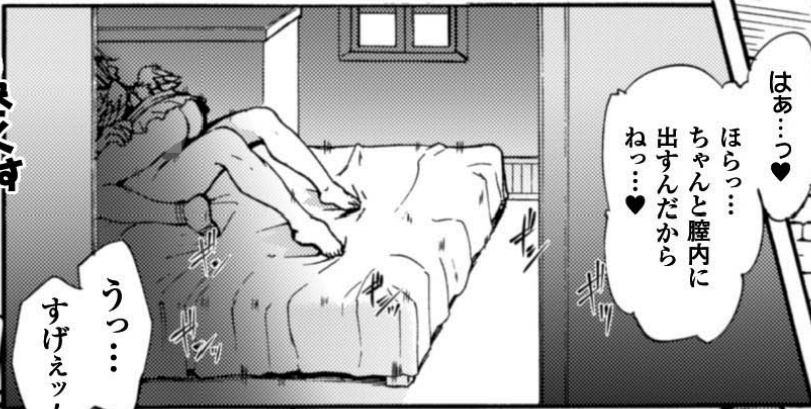
「な、何するの? まさか! うそ! うそ!」

にゅちゅちゅっ! おひりいいいいいっ!

にゅちゅちゅっ! ぬちゅいっ!

わずかな窄まり目指して触手共が殺到する。必死にアナルを閉ざすものの、乳首にマンコ、そして全身を撫で上げる快感にいつまでも力が保てない。

男を搾り尽くす
性天使が帰ってきた!



うっ…
すげえッ!

はあ…っ♡
ほらっ…
ちゃんと膣内に
出すんだから
ねっ…♡

あはっ…♡



おっ! おっ! おっ!



おっ!

ANGEL
of
ANGEL
エンジェルオア エンジェル?
ろーがん
漫画 COMIC 老眼

なん…だ
コレッ!

あなたの全部…
あたしの子宮が
吸い出しちゃう
からっ♡

やばっ…
せしっ!!?

おっ! おっ!



んっ♡
きだあぁ……♡

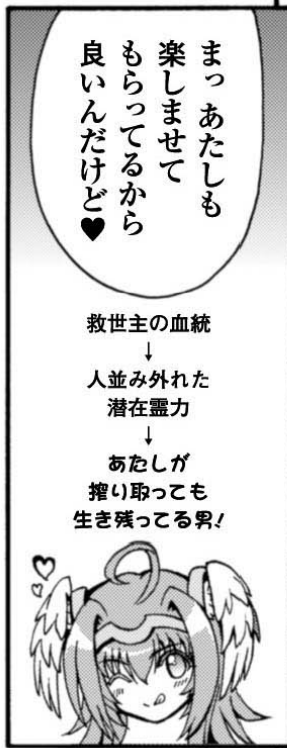
元気な精子……
全部搾り出して
あげる……♡

っ……!!?
うあッ……
あ……

おち●ぼだけは
素敵だったん
だけどねえ！

こいつも
違ったかあ

あゝあ
死んじゃった



まっあたしも
楽しませて
もらってるから
良いんだけど♡

救世主の血統
↓
人並み外れた
潜在霊力
↓
あたしが
搾り取っても
生き残ってる男！

天界も
天使づかい
荒いんだから

まったく……急に
「救世主の血統を
見つけてこい」
だなんて





俺の仲間を腹上死
させたっていう
「死の快樂天使」は

そうか……
やっぱりお前か



まやっ!!

なによ
あんた達!!



はあ!?
なによその
ダサイ名前……

ってちよっ
放しなさいよっ!

勝手に……

この街だけでも
お前に何人
殺されたと
思ってたんだよ

へへっ……まあ
つい手を出しちまう
奴らの気持ちも

このカラダ見りや
わかるけどな



ざっわ
ううう

痛っ!



触……ッ

なあッ!?

噂で聞いたぜ？
中出しさえ
しなけりや
死なないん
だってな

天の御遣いたる
あたしに
こんなコトして
ただで済むと—

あッ…
アンタ
たちっ!

ひらッ!?



濡れてんじゃ
ねえか

へっ…
なんだよ
コイツ



ホラよ
お前もその気なら
悪いようには
しないぜ？

天使のテクで
オレのも昇天
させてみろよ



……ッ

おお……
そうそう



変な気
起こすんじゃ
ねえぞ？

満たしてくれらるなら
彼じゃなくてもいい。



第三話 墮ちゆく想い

魔を祓う神巫

宮道京香の寝取られ退魔帖

くどうきょうかのねとられたいまちよう

登場人物紹介



宮道京香

負けん気の強い退魔師で一族の掟である「初夜」を控えている。幼馴染みの遼拓に対して中々素直になれない。

御門遼拓

細かいことは気にしない竹を割ったような性格の好青年。京香とはよく喧嘩になるが戦闘での息はぴったり。

狭間君彦

京香のよき理解者である叔父。整体院を営んでいる。今は亡き京香の母に恋心を抱いていたが……。

前号までのあらすじ

妖魔と結託した君彦に淫紋を刺された京香。得意としていた秘術を逆に取られた「疑似神威」で無抵抗になった彼女は、思いつきで不良たちの乱交にコスプレ痴女として送り込まれ、遼拓の知らない離部分をさらに成長させられてしまった。

男が扉を開けると、むわりとした熱気が待合室の清浄な空気を押しやるように流れ込んできた。白衣をなびかせながら奥へと進んでいく。カーテンで覆われた目指す施術台の向こうへ近づくと、奥から漏れ聞こえてくる物音が大きくなる。

「ん、ちゅ……はむ、れる、ちゅううつ……っ！」

「うああ……だ、だめ……美代ひゃん……！！そんな、とこーんくう……!!」

夜の帳が落ちかける夕暮れの整体院内。昼間の明るく清潔なイメージとは打って変わって、不気味なほどひっそりと静まり返る室内にべちゃべちゃと生々しい水音に混じって少女の苦悶の音が響く。

「あぐう……っ！ お願いだから、正気に戻っふえ……あ、あ……ふあああ……」

こらえきれずにこぼれた熱い吐息。甘い匂いはさらに濃くなり室内を満たす。

狭間君彦がカーテンを捲ると、電気が消された薄暗い安楽椅子の上にその淫靡な声の主の姿はあった。全身を縛り付けられ、白磁の華奢な太ももを目いっぱい左右に広げる宮道京香の無様な姿——名門退魔家の子女としての凛々しさなどその格好からは微

塵も感じられない。

「だ、だめ……だめえ……汚い、ふあああ……ううう……!!」

「ふふ、随分と待たせてしまったようだね——美代、もういい」

有体もなく曝け出された京香の恥部に覆いかぶさっていた助手の名前を呼ぶと、彼女は呆けたような表情のまま顔を上げた。

舌先からトロトロと垂れる粘液が、休みなく舐っていた純白のショーツをさらにしとどに染め上げていく。

「うあ——ッ!? そ、その声……き、きひやまア……!!」

君彦の声に反応したのか、それとも股間の甘い刺激が不意に消えたからか、猿轡を噛まされた京香がもごもごと怨嗟の言葉を吐く。

「急用が入ってしまったってね。しかし代わりにと美代に頼んでおいたマッサージ。だいぶ楽しんでもらえたようじゃやないか」

「げへへへ、部屋中にメスのくっせえ匂い撒き散らしやがってよ……お友達にマンコ舐められるのがそんなに気持ちよかつたか？」

カーテンの向こうから現れた二人の悪魔を京香は睨み付ける。桃色に染まりかけていた頭の中に、沸々と怒りの感情が湧き上がっていた。

「美代ひゃんになにをした……!! こんな、変態みたいなことさせふえ……今すぐ、彼女を正気に戻せっ！」

「変な言いがかりはやめてくれ。彼女はこの通り正気さ……まあ、普通の人間には少しばかり媚香が効きすぎるようだがね」

紫煙がけぶる中空に君彦が手を差し出すと、まるで従順な飼い犬のように美代はその手を舐め始める。

「狭間、先生……んあ……言いつけ通り、京ちゃん

のお股ずつとべろべろしてました……あう……だから早く、ご褒美を……私もう、我慢できない……っ」

京香は思わず言葉を失う。面倒見のいいしつかりものお姉さん——そう昔から慕っていた美代の口から聞いたこともない甘えた声がこぼれでてる。

「約束が違うじゃないか……!! 私がお前たちの言いなりになれば、周りの人たちには危害を加えない……!!」

「別に危害を加えているわけじゃないさ。これは彼女が自分から望んでいること——京ちゃんだってわかるだろう？ こんなにパンツをべとべとに濡らして悦んでいる同じ仲間なんだからねえ」

「んあ……!!」

美代をあやす片手間に、君彦の指先がぼつてりと膨らんだ京香の土手を滑る。べとべとになった猿轡に新たに沁み渡る色を含んだ声。

美代によつて何時間も舐めしやぶられていた敏感な性器は、たったそれだけの刺激でジンジンと拭いようのない痺れを脳に伝えてくる。

「クリトリスもこんなに腫れさせて……。相変わらずの好きもの具合だ」

くちゅ、くちゅ……コリコリ……ッ！

「あくう……っ!? そ、そこ……ひやめつ……ああ、ああ……!!」

「ああ……ずるい……先生にご褒美もらうの私なのに……京ちゃんには遼拓君がいるでしょ？」

「……ッ！ 遼拓は、関係ないっ……!!」

唾液と愛液でヌルヌルのショーツの上からぷくぷく浮き上がった豆粒をいやらしく転がされ、狭い椅子の中で京香の身体がピクピクと跳ねる。

「あ、あ、あああ……!! も、もう……がまん、できにや——ふくうう……!!」

じわ、じわあ……!!

「あん、なんだあ？ パンツの奥からどんどん染みが溢れてくるぜ？」

「蛇鬼の言う通りコリコリと女芯を指先で弾かれるたびにショーツの下でピンク色の恥唇がうごめき、透明の染みがじゅわじゅわと広がっていく。」

「おやおや、随分溜め込んだものだ。ほらほら、我慢は身体に毒だよ京ちゃん」

にゅぶつ……にゅぐぐつ……にちゃああつ！

「むぐううあああつ——!!」

カッと目を見開き、咆哮のような嬌声が轟く。口を塞がれていなければ外にまで響いていたかもしれぬ。

君彦の指が敏感な粘膜を掻き分け、ヒクヒク震える股座の奥にするりと入り込んでいく。

（あ、ああ……挿入……るうう……つ！）

「わかるかな京ちゃん？ ちょっと前まではまるで幼児のそのようにびったりと閉じていた清らかな陰唇が、今では僕の指先をしゃぶるように啜えこんでいるのが」

「だ、だまれ……だまれええ……!!」

「伝統ある退魔家の跡取りとして大切に育てられた君がこうもあっさりメスの身体になつてしまうなんてね。まして『初夜』はこれからだというのに」

君彦の調教が始まってからすでに十数日が経った。昼は学校で、放課後はこの整体院へと呼び出され、辱めの限りを受ける毎日……。

気づけば京香の貞操を守る巫術の効果は少しずつ解術されつつあった。

本来なら初夜を迎えるまで彼女の貞操を守る術座まれた時から彼女を守ってきたその術は、股上に刻まれた淫紋により日に日に触まれていた。

「無駄にがんばりやがつてよお……予定なら今頃処女ぶち破ってピンピン啼き喚くお前の腹中に妖魔の仔を身籠らせてやつてたはずなんだが」

「だが……お前らの……! お前らみたいなゲスどもの思惑通りになんか……なるものか……!」

震える声を絞り出し、侮蔑の眼差しで二人を睨み付ける京香。

この十数日、思い出すのもおぞましい陵辱を身に受けながら、退魔師として、宮道家の子女としての誇りと遼佑への一途な思いだけが京香の心を支え続けていた。

「まったく、その生意気な目……僕を捨てたあの女を否が応でも思い出してしまおうよ」

頑なな意志に燃える瞳と、感情を失った冷笑的な視線が中空で鏝迫り合います。

「まあいいさ。まだ時間はある。ゆつくりじっくり墮としていけばいい。いくら気を張ろうと、君の身体はもうこの通りなのだからね」

ぐち、にちゅ、ぐちゅぐちゅつ……!!

「ふあつ! ふうう、ふううつ……んんつ——!!」

淫液をぐちゅぐちゅと指先で鳴らし、京香の温かな膣内の感触を丹念に確かめながら君彦は言う。

「さあ美代ちゃん、マッサージの続きだ。どうやら京ちゃんはあれだけじゃ物足りなかつたらしい」

「わかりました、美代がんばります、ご褒美もらえるように精一杯やります……!!」

まるでお預けを食らった犬さながらに、美代の忽然とした貌が再び京香の股座へと覆いかぶさる。

「あはは、京ちゃんのお豆さん、先生にいじめられたせいでぶつくりと勃起しちやつて……とってもおひそお……ジュル、んれろおおつ♡」

「ひぐああ……!! ああ、おああああつ!!」

捲れ上がったショーツの下でピクピクと芽生えていた女芯の蕾を、美代の舌先がべろりと舐め上げた途端——縛られた椅子の上で京香の身体が文字通り跳ね飛んだ。

「はぐうつ、ぐぐうう……ひゃうああアアツ!!」

「らめえつそれらめへえええええつ——!!」

「ぎやはははははつ! 指マンとクリ舐め同時責めはさすがのお嬢ちゃんも堪えるみてえだな」

君彦の指先がクリトリスを膣側から押し上げ、包皮の捲れかけた女芯を美代の唾液まみれの舌べらがヂュルヂュルとしゃぶり上げる。

「むぐうううつ……!! ふうつ、ふぐぐつ……いたああつ?! 菌ア、菌は立てちやダメだああつ!」

何時間も焦らされた身体の限界はひどく呆気なく訪れた。ばつくりと無様に開かれた股がビクンツと痙攣し、最初の軽い絶頂感がふわりと京香の身体を持ち上げる。

「あ、あ、ああああつ——あふあああ……つ!」

（そんな、な……悔しい、のに……こんな、ことで……イッ……くうう……つ♡）

じよろ、じゅわ、じよわああつ……!!

膣穴から溶け出すように白濁の雌蜜が溢れ出て、君彦の腕を伝ってトロトロと流れていく。

「さっきの威勢はどこへやらだ。次から次にイキ汁が溢れてくるじゃないか。ほら、掻き出してやるから自分でしっかり見るといい。君の身体がどれほど淫乱かをね」

じゅぼつじゅぼつぐちよ、ぐちゅぢゅぢゅつ!

「うあつああつ!! そ、そんなに激しくううつ!!」

「れちゅ、じゅる……ヂュルツヂュルウウ……ふああ……ちゅるつ。ふああ……えへへ、京ちゃんのお豆さん、どんどんおつきしてる……つ」

「あ、あ、あつああつ……だめ、だめええ……うあああつ……あはああああつ!!」

（そんな、な……お、おまんこの中、ほじくられてっ……クリ甘噛みされてええ……同時にイクのつ、と止まら、ない……つ!）

上と下からの快楽責めに絶頂の波が次々に襲い掛かった。

きつく睨み付けていたまなじりはふにやりと弛み、随喜の涙がポロポロ類を伝って流れていく。

「ぼらぼら、もう少しで処女膜に届きそうだ」

「だめ、だめええ……っ！ ああつ、ふああつ……そんな、抜げるみたいにいっ……！」

ただでさえ指一本できゆうきゆうと音を上げてしまふ恥穴の中で、君彦は鉤状に関節を曲げて愛液を掻き出すようにぐぼぐぼと抽送する。

気づけば淫紋が妖しい輝きを増し始めていた。何時間にもわたって女芯に溜め込まれた快感が猛烈な勢いで競り上がってくる。

「負ける、ものかあ……今負けたら……私の身体が、私の神力が、こんなやつらの手に……！」

守らなければ——ただその一心で京香は菌を喰いしはる。この場を耐え、蛇鬼を退治するんだ。

この身体はこの身ひとりのためだけにあるのではない。

彼女と婚儀を交わす男——将来の夫となる退魔師のためにあるのだ。京香の脳裏にふと遼佑の姿がよぎったそのとき、

「あはは、すつごおい……京ちゃんのクリちゃん、小指くらいになつちやつてる……ジュルル、とつてもおいしそお——はむっ♥」

「えあつ——!!」

無邪気な声を上げてまるで甘美な葡萄にありつく子犬のように、美代の生温かい口内が京香の陰核を包み込んだ。

「ンジュル……ジュブツ、レロレロオオツ……ジュルルッ！」

「~~~~~ッッッ!!」

遼佑の面影が一瞬で頭の中から吹き飛ぶ。

声にならない悲鳴が上がり、ガクガクと京香の身体が引き撃る。

「あ、ああ、あつ、だめだつ、ま、待つて——！」

視界が潤み、端正な鼻先がひくひくと震える。

「あつ、あああああああつ——!!」

椅子の中で盛大に絶頂しながら弓のようになるのけぞる京香。

噴き上がる透明の飛沫に気をかける様子もなく、美代は厚い包皮の隙間に舌をねじ込んで最も敏感な核の部分で美味しそうにしゃぶり続ける。

「レロ、レロオツ……ちゅぶつんむああつ……！」

「おおつ、ああつ……あおおオオツ——ッ♥」

ガクツ、ガクンガクン——ぷしゃつ、ぷしゃああつ、ぷしゃああつ！

足の爪先までピンと張り詰め、断続的にイキ潮を噴き上げる京香の姿を見下ろしながら君彦は満足そうにクツクツと喉を鳴らした。

「どうだい京ちゃん、素直に負けを認めるのならもつと深くて気持ちいいところを揉みほぐしてあげようじゃないか」

背もたれに埋まる京香の顔をその手がゆつくりと掬い上げる。

「うる、さい……っ」

「ん……？」

せえせえと肩を荒く上下させ、絶頂の快感に押し流されて虚ろながらそれでもしつかりとした意志の籠もる双眸が君彦をひたと見上げていた。

「くた、ばれ……っ……わた、ひ……は……ぜつた……い……負けない……い……っ！ お、あ……っ♥」

の形に広がった恥穴がゆつくり閉じていく。

「……」

数日が経った。あれからいつたいどんな激しい責め苦が待ち受けているのかと緊張の糸を張り詰めていた京香にとつて、拍子抜けするほどあっさりといつた日は過ぎ去っていった。

（てっきり私の心を折るためにこれまで以上の辱めを与えてくるはずだと思っていたのに……！）

今までの調教なんてなかったかのようにこの数日接触は一切ない。君彦の言いなりになつていた不良たちも、学校で京香に会つてもにやにやと遠巻きに眺めてくるだけだった。

その理由はしばらくして京香自身よく理解できる現実の問題となつて表れ始めた。

「はあ……はあ……ん、くう……っ！」

ちゅぶ、くちゅ……ぼちゃん……！

くぐもつた水音が狭い空間に大きく響き渡る。呼吸するようにびくりと震えた肩を、京香は女子トイレの個室の中でぎゅつと抱きすくめた。

（こういう、ことか……っ）

便座の上で前傾姿勢になつて細かく息を刻む。太ももの間で半脱ぎになつたショーツのクロッチからトロリとした粘液が滴る。

京香の体内に埋め込まれた刻球は、単に淫紋を生成するだけではなく日増しに彼女の身体に堪えがたい疼きを刻み込んでいた。

（最初の頃とは比べものにならない……こんなの、意志でどうこうできるレベルじゃ……！）

むずがゆいような甘がゆいような痺れが彼女の下腹を悶々と責め苛む。

午前中の授業さえまともに受けることができなかつた。ただ座っているだけで身体が火照り、全身からじっとり甘い汗の匂いを放ち始めてしまう。
「けど、慰めようとするほど解消されるどころかどんどん疼きがひどくなって……！」

それも間違いなく君彦の思惑の内。彼の意図は京香を快楽によつて無理やりに屈服させる短期戦から、自らどうしようもなくなつた身体を差し出すように仕向ける長期戦へと変わったのだ。

「こんなの、耐えきればいいだけだ……ただ、耐えれば……！」

股座に溢れる蜜液をゆっくり拭い取りながら、それだけでまた息が上がつてしまいそうになるのを懸命にこらえる。なんとか興奮を鎮めて教室に戻ろうとしたときだった。

「ようキョーカ、ご無沙汰だな」

「村瀬……！」

君彦の言いなりになつて京香を辱めていた最低の不良たちが、にやにやといやらしい笑みを浮かべてトイレの前で待ち伏せていた。

「授業中に女子トイレでなにしてたんだ？」

「お前には関係ない……！」
馴れ馴れしく顔を寄せる村瀬ににべもなく吐き捨てる。

「まあそうカッカすんなつて。俺たちあんなこともこんなことも一緒に楽しんでやねえか」

村瀬の筋骨逞しい手が有無を言わさず京香の肩を掴み壁際に押し付ける。

「急に手を出すなつて言われてもよお、我慢できるかよ。こつちはもう三日もてめえのエロい身体使い損なつてんだよ。なあ、今から一発抜かせろ」

耳元で馬鹿みたいな戯言を当然のように言つてのける人間以下の獣。いつもの京香なら侮蔑の一瞥とともに股座を蹴り上げているところ——なのに。

「く、うう……さ、触るな……っ」

いやらしい手つきで身体のラインをなぞられるだけで、ぞくぞくと背筋が震えてしまう。

このまま体育倉庫に連れていかれ、男たちの白濁液まみれになるまで犯される——そんな卑しい想像をしてどうしようもなく興奮が甦つてくる。

「お前も授業中に我慢できずにオナちちまうくらい限界なんだろ？ お前のためにとつといた三日分の精子、思う存分ぶちまけてやるからよお」

「や、やめ……押し付けるな……うう……っ」
（せつかく、鎮めたばかりなのに……っ！）

突き破らんばかりに膨れ上がった村瀬の股間がズリズリと京香の下腹に押し付けられる。下着の奥で愛液が溢れてくる感覚が重く頭の中のしかかる。「へへ、いい顔になつてきたじゃねえか。お前のほうから頼むならヤツてもいいつて話だったからなあ」

村瀬の顔が近づいてくる。早く拒まないと——そう思えば思うほど、男の匂いを漂わせた胸板や太い首筋から目が離せなくなる。

「だ、だめだ……今引きずり込まれたら、なし崩しに……！」

理性ではわかつているのに。無造作に腰を抱かれ肉厚の身体の中に引き寄せられる。獣じみた男のゲスな視線がドキドキと心臓を高鳴らせ、太ももの間をドロリと大粒の蜜玉が伝つていく。

「い、や……や、だ……っ！ やめ、ろ……こすりつけるな……あつ……！」

「いやじゃねえだろ？ 言えよ、俺のチンポがほしいつてなあ……キョーカの淫乱なケツ穴ズボズボはじくつてくたさいつて言え！」

耳元で淫猥な言葉をささやかれ、興奮が止まらなくなつてしまう。

「言うな……そんなこと……言われたら……っ！」

「あ……う、あ……ほ……し……い……っ♥」

勝ち誇つた村瀬の手が頬を引き寄せる。吸い込まれるようにして唇と唇が触れかけたそのとき、愕然とした声が京香の後ろで響いた。

「京香……なにしているんだ……？」

信じられない光景を目にして呆然と佇む遼佑の姿が、はつきりと京香の瞳にも映つていた。

* * *

袂の滝には重い沈黙が横たわつていた。妖魔退治の間もほとんど口を聞かないまま、二人の退魔師は時折目が合つてはどちらからともなく視線を逸らしてしまう。

（見られた……遼佑に、あんなところ……っ）

昼間の出来事が京香の頭の中から離れない。遼佑もきつとそうなのだろう。

早く誤解を解かないと——そう思つて口を開きかけては、閉じてしまう。

（いったいなんで言つたら……あんな奴らに囲まれて、いやらしい想像までして……遼佑が来なかつたら私は……！）

今更ながら自分にかげられた淫呪の効果が空恐ろしくなる。こうして袂の清水を浴びているこの瞬間でさえ、下腹がジクジクと疼いて仕方なかった。

「婚儀、もう少しだな」

「え——？ あ、ああ……そうだな」

不意に遼佑が口を開く。その口ぶりになにかを問うような響きはない。

「最近になつてさ、よく考えるんだよ。誰がお前の相手になるんだらうつて」

思わず顔を上げると、真剣な表情の遼佑が京香を見つめていた。

「それは……私が決めることではないから——」

「京香のことをなにも知らないどこかの男が突然やつてきて、お前の全てをもらつていくんだぞ。怖い

前号までのあらすじ

黒猫を屈服させ、平和な学園生活を取り戻した睦月。しかしその背後で、天使ラファによる陰謀が動き始めていた。

「最終回」がムンバクごました！
「次」は「下」ムンバクジン連載最終回！！

も…だめですって

ミカさん…あつ…

最近ミカさんの
様子がなんとなく
おかしい……

02:02

だめって……

ここはまだ
元気なの？

web版コミックヴァルキリーでも連載中！ <http://www.comic-valkyrie.com/>

思春期なアダム

第24話

E U I L E E S

天海雪乃

原作：かささき
さかき

ヴァルキリーコミックス 巻 好評発売中
あとみっく文庫 巻

だってもう
2回も……

睦月君が黒猫と
Hしてるの
みてからずっと
ムラムラ
しちゃって

おねーさん全然
足りないの♡

あーっ

隙あらば
押し倒されて

それも何度も
イクまで中々
解放して
くれなくて…

明日も…っ
学校…ある
のに……

アッパッパ

ギッ
ギッ
ぱちゅ

ほちゅっ♡

きゃん

て

じゃ早く
済ませなきゃね♥

うあ…

急にそんな
激しく
動いたら…

ミカ…さんっ

も…出…っ



ミカさんに全部
吸い取られちゃう

ドロン

あーあー

ウウウウ

はー

……あ

わっ

もう
こんな時間だ

自分の部屋で
寝ますよ

本当に朝
起きれなく
なっちゃっ……

このまま
添い寝
しよっか？

ざんねん
じゃもう少し
飲んでから
寝よっかな

お酒ほどほどに
してくださいね

じゃ
おやすみなさい

おやすみ♡

……良い夢を

聖王に最も近かった男バロック登場！
彼を味方につけるためにベアトリスの肉接待が始まる！

魔剣士 リネ

乙女穢されし戦場

【第3話】バロックという男

原作 / まくらカバースoft
さかいひとし きりしま
小説 / 酒井仁 挿絵 / 桐島サトシ
ILLUSTRATION

1

豪華な椅子に恰幅のいい体を沈ませた男。その傍らには、護衛の近衛騎士ではなく、美しい女たちがいた。立ち居振る舞いの優雅さから見て、貴族令嬢のようだ。

男はオーウェンを前に、いらいらした態度を隠そうともしない。

名を——バロック公爵という。

（この男が「かつてもっとも聖王に近かった男」なのか）

ハイランド王国のグスタフ王より命を受けたオーウェン將軍の目には、この男はそれほど人物には見えない。

しかしグスタフがこの男を恐れ、国境のセバスチャン城に追いやって隠遁生活を送らせているというのは、間違いないところだ。

（それもひとえにこの男が『聖王』の正統な血筋であるがゆえ……しかし、どう見てもこ奴は王の器ではない）

隠遁しているとはいえ聖王の血筋にある男。オーウェンは自軍と美少女魔導師たちを率いて、セバスチャン城を訪れたのだ。

「オーウェンさま。城の警護も大したことはありませんでしたわ」

と、ひそひそ声で耳打ちしてくるのは、オレンジの髪を三つ編みにした少女ドロシー。仲間の魔導師ウエンディと共に、オーウェンや兵士たちに陵辱された揚句、身も心も肉欲の虜と化した少女たちである。

「そうですね、この程度の警備兵なら

あたしたち二人で殲滅できます」

ピンク髪のウエンディは風系の魔法、ドロシーは炎魔法を自在に操る、強力な魔導師なのだ。

「グスタフさまの命は、バロック公とその妹クロエの身柄の拘束だ。ここに拠点を置き、あの憎つきアレスの動向を探るのだ」

そう、オーウェンはグスタフ王の命令とは別に、恨み重なる元ハイランド將軍のアレスを追っていた。

風の噂では、アレスは「聖王の後継者」を擁立して反乱軍を興したという。

（やつは、てっきりバロック公を旗印にして反乱軍を率いていると思っていたが……ペアトリスもこちらに呼んで、今度こそ息の根を止めてやる！）

オーウェンは慇懃にバロックの前で膝を折る。

「近ごろは巷の世も乱れている様子。グスタフ王はバロック公の身を案じておられるのです。どうかしばらく我らに御身の護衛をさせてください」

「なら、なぜもつと早く来ぬのだ！グスタフの統治も評判が良くないと聞か……えい、忌々しい」

かつては聖王の後継者候補でもあった自分が、こんな狭い領地の一貴族に貶められたことに、バロックは大いに不満を感じているようだ。

それから数日後——

アレスたち反乱軍の動向もまだ掴めず、ペアトリスも到着していないのでオーウェンは手持無沙汰だ。

「バロック公はいずれにおられる？」

「こ、公はただいま所用でありまして」居心地の悪そうな護衛兵の態度で、オーウェンはピンときた。

こんな辺境の地で重要な仕事などあるはずがない。おそらくはあの娘たちと淫らな行為にうつつを抜かしているのだろう。

（なるほど、王の器でないだけでなく、下衆で好色な輩ということか）

英雄色を好むというが、過度の好色は己の弱みにしかならない。オーウェンはくくくと喉奥で笑った。

薄闇に、白い肌が踊っていた。ろうそくの小さな灯に照らされているのは初々しさを残す乙女の柔肌。

「ああ……バロックさま、どうぞお情けをくださいませ」

二人の美しい娘たちがバロックの股間に顔をうずめ、屹立した肉棒をびちやびちやとねぶつっている。

昼間の清楚な印象からは想像もできないほど淫らな笑みは、とうてい貴族令嬢とは思えぬほどだ。

「バロックさまのおちんぼはなんてご立派なのでしょう。このようなお宝に奉仕させていただきます、わたくしたちは幸せ者でございます」

バロックは伸ばした両手に娘たちの尻を掴み、指先を割れ目の奥に潜らせているが、その顔には明らかに退屈の色があった。

（この娘たちの身体にも飽きたな……

新しい娘でも手に入れたいところだ）

とはいえ、バロックも隠遁生活を強いられる身、そうそう警沢が言える立場ではない。せいぜいが側室二人を囲うのが関の山なのだ。

と、そのとき——

こんこんとドアをノックする音に生返事をする、オーウェンの連れていた魔導師の少女たちが姿を見せた。

しかも魔導師用の強化服ではなく、見るからに肌の露出が大きく、ボディラインがくっきり見える薄絹をまとっている。ドロシーとウエンディは情欲に染まった目でバロックを見つめ、妖艶に微笑んだ。

「バロックさま……わたくしたちもぜひ、バロックさまにご奉仕させていただきますませんか」

「ふふふ……」

無論、少女たちがバロックに見せる媚は、オーウェンの命じたこと。少女たちの色香でバロックを籠絡し、いのように操るつもりなのだ。

だが、ドロシーたちの思惑に反して、この好色な男はうんざりした顔になったのだ。

「お前たち、生娘ではないな？ いや、相当に男に仕込まれているとみただ」

「は、はい……？」

「私は自らの手で純潔を散らせたおなごにしか興味はないのだ。お前たちのような中古品にはなんの興味もない」

「……………」

言葉に、魔導士の少女たちは呆気に取られる。

オーウェンもハイランドの兵士たちも、自分たちの裸身を前にすれば例外なく陰茎を奮い立たせた。飽くことなく淫ら穴に、肛門に、唇に勃起したモノをねじり込んできたはず。

「大かたオーウェンとの差し金であろう？ 私を喜ばせたくば、男の味を知らぬ、まっさらで器量よしの娘をよこせと伝えるがよい」

つまらなそうにそう言うと、パロックは陰茎をしゃぶっていた女を抱き寄せて仰向けに押し倒し、股を開かせた。「パロックさま……っ」

「どうだ？ この娘は私が仕込むまで父親以外の男に触られたこともなかった。それが見る、いまは私に抱かれると思っただけで、ここをこんな濡らしておる」

ぐい、と腰を沈めると、勃起ペニスはずぶずぶと娘の肉穴に飲み込まれていく。娘は美しい魚のような裸身をくねらせ、ねっとり絡みつく甘い声でよがるのだ。

「ああ、おちんぼっ。パロックさまのおちんぼがわたくしのおまんこにいつ」

悶える娘にもう一人の娘が唇を寄せ、ちゅばちゅば頬や首筋をねぶりだす。パロックはその巨軀に似合わない動きで腰を振り立て、濡れそぼった肉穴を堪能する。

「おお、やはり自分が仕込んだメス穴は格別よの。お前たち、私以外のマラ

が欲しいと思うか？」

「いいえっ、パロックさまのおちんぼしかいりませんっ。もつとわたくしのおまんこ穴で悦んでくださいませっ」

パロックはもうドロシーたちに関心を失ったのか、一心不乱にピストンを浴びせ続ける。

そのなんとも淫猥な光景に、魔導少女たちは何も言えなかった。

すげなく門前払いをくつたドロシーとウェンデイは、惨めな気分です。オーウェンに報告した。

「申し訳ございません、オーウェンさま、お役に立てなくて」

「下衆で好色なうえに生娘にしに興味がないとは、呆れ果てた男だな」

まあいい、とオーウェンは考え直す。考えるまでもなく、それほどはつきりした性向があるなら、パロックを御するなどいとも容易い。自分には「とっておき」がある。

「野心がない分、グスタフ王よりよほど扱いやすいわ、くくく……」

2

その「とっておき」が届くまで、オーウェンはしばらくセバスタンチャン城に逗留することとなった。

正直、辺境の城など退屈だと思っていたが、意外や古い城には貴重な文献や工芸品が多数あった。ただしパロックの反乱を恐れているグスタフの意向で、武器の類は少ない。

パロックは……相変わらずだ。

暇にあかせて女たちとの行為に耽り、オーウェンたちハイランド軍に關しては、とりあえず自分に關わらなければいいと決め込んだようだ。

そんなある日。オーウェンは城の古い書庫でいっぼう変わった箱を見つけた。いかにも古い、その長い箱にオーウェンはなぜか心ひかれ、かかっていた鍵を打ち壊す。

「これは……！」

それは一振りの長剣。拵えからして相当に古い代物だが、柄を握った瞬間、電気が走ったような衝撃がオーウェンを貫いた。

ぞわりっ。と背筋が凍るような恐怖と、それ以上に圧倒的な禍々しい「こちら」を感じる。抜き放つてみると、それは刃こぼれ一つなく、目が吸い寄せられるほどに美しい。

だがどういうわけか、見る角度によって闇のように黒く見える。

「黒き刃……」

パロックから譲り受けよう、などという考えは起こらなかった。これは自分が持つために作られたに違いないとさえ思った。

ドロシーとウェンデイがそのときのオーウェンの目を見ていたら、恐怖のあまり、その場にくずおれていただろう。彼は——ハイランドの將軍は漆黒の妖刀に魅入られていた。

「おお、ベアトリス。しばらく見ぬうちに大きくなったものだ」

パロックは、優雅に会釈する美少女の胸元や腰回りを舐めるように見つめる。この好色な男は一目でベアトリスが処女であることを直感していた。

「パロックさま、お久しぶりでございます。またお目にかかれて光栄です」確かに淫らな性奴隷として調教されたドロシーたちと違い、ベアトリスはまだ処女膜を保っている。

しかしパロックといえど、この見目麗しい少女が膣穴以外の部分を開発され、尻穴で悶えよがる淫乱であるとは看破できなかった。

だらしなく下に下がるパロックの顔に、オーウェンは心中でほくそ笑む。

「ヘステリア公国は我がハイランドの友邦。パロック公におかれましては、ベアトリス女王陛下とぜひとも友好的な関係を築いていただきたく存じます」

「友好的」という言葉にパロックは敏感に反応する。

言うまでもなくオーウェン自身もその表現に含みを持たせている。生娘でしかもヘステリアの女王、聖王の血を引くパロックには、身分的にも理想的な相手といえるだろう。

「ふむ、無論である。なにしろ私は聖王の血を引く者。ヘステリア公国とは未長く友好的であるべきだ。なにしろベアトリスがいまの地位につくとき、尽力したのは私だからな」

ヘステリアの王は、血筋よりも魔導の才能が重視される。パロックがその

審査員の一人だったのは事実。パロックは覚えていなかったが、そのときベアトリスの次に候補に挙がっていたのは、他ならぬオーウェンであった。ベアトリスはパロックの傲慢な態度やいやらしい視線にはまったく気づいていないというふうには振る舞っている。その邪気のない様子が、パロックの欲望をいっそうそそるのだった。

「どうでしょう、我がハイランドの厨師に命じ、お二人のために晩餐の席を設けさせていただきますのですが」

「うむ、苦しゅうない。せいぜい私を楽しませるのだな」

「は、我ら喜んでパロック公を歓待させていただきます」

オーウェンの言葉にヘステリアの女王も鷹揚に頷く。

「わたくしにとつてもパロックさまは大恩あるお方。よろこんでお相手させていただきます」

満足げに頷くパロックは知らない。この美しき女王がパロックの下品な視線を受け、その白い肌を火照らせていることを。処女の証を保った乙女の肉唇は熱い汁で溢れ、その尻穴が切なく疼いて仕方がないというところ。

その夜、行われた晩餐会は贅を尽くしたものであった。

辺境で隠遁を余儀なくされていたパロックは、久方ぶりの上物の葡萄酒に舌鼓を打ち、上機嫌で杯を重ねた。

「むははは、あの臆病な小娘も立派になったではないか。体つきもずいぶん

女っぽくなりおつて。お前を推挙した私の目に狂いはなかったな」

「わたくしなどはまだまだ若輩。パロックさまのように人生経験豊富な方とお話しさせていただき、本当にためになりますわ」

パロックの杯に手ずから酒を注ぐその所作は、優雅でありながら媚に満ち、目の確かなものが見ればさながら高級娼婦と見まごうばかりだった。

大陸きつての魔法国家の君主とも思えぬその振る舞いを、パロックは毛の先ほども疑うことなく、ますます酔いを深めていく。

いまはもう隠すこともなく、ふつくと盛り上がった美少女の胸元をじろりと見つめ、にやついている。ベアトリスは嫌な顔をするどころか、決して笑みを絶やすことがない。

ベアトリス自身も少量だが酒を口に、目元を赤くしている。普段の清楚さから一転、なんとも妖艶な雰囲気をもたらせた美少女に、パロックはぐくりと生唾を飲んだ。

（この娘ももうすつかり女だな。私に惚れ直したか？）

と、ずうずうしいことを考えてしまいうくらいに、ベアトリスは彼に好意的に見える。

よもや再会したその日に深い仲になれるとまでは思っていないが、なんと少女のほうから「別室で呑み直しませんか」と誘ってきたではないか。パロックに否やがあるわけもなく、二

人はパロックの私室に移動する。

「失礼いたしますわ」

ここはいつも側室と密戯に溺れている部屋ではない。小国の領主とはいえ、パロック個人の寝室は別にある。パロックがソファに腰を下ろすと、なんとベアトリスは当然のように、彼の真横に座ってきたのだ。

（おお……なんともいえぬよい香りが漂ってくる）

ほとんど太ももを押しつけてくるほど近い距離。酒を注ぐと晩餐の時よりも乳の谷間がくつきりと見える。

その柔らかな肉球が、いまにもパロックの二の腕に触れそう。

「パロックさまは意外と立派な体格をしていらつしやるのですね。やはり、聖王の血を引いていらつしやる方は、肉体にも恵まれておられるのですね」

剣を振るうでも鍛えているわけでもないパロックのする運動といえは、側室の上で腰を振ることくらいなのだが、ヘステリアの女王は男に触れる機会などないに違いない。

ただ体格がいいだけのパロックのどこに、男を感じているのか。

「ヘステリア公国には女の魔導士が多いと聞か、ベアトリスも男と触れる機会は少ないではないかな」

ええ……と頷く美少女は、恥ずかしそうに目をそらす。それでもちらちらとパロックのほうを見ては、目を潤ませている。

（ふふ、私の血、聖王の威光を感じて

いるようだな）

もつと間近でこの美貌を拝みたい。美貌だけでなく、きゃしゃな身体線を、ふくよかな乳房、安産型の腰つきを拝みたい。

パロックはわざとらしく「少し灯心が暗くなったか」などと言いながらランプの焰を少しく大きくした。すると薄闇の中でベアトリスの顔色がすつと青ざめたような気がした。

「ど、どうかしたのか」

慌ててランプを手には少女の顔を覗き込もうとするが、ベアトリスは炎からあからさまに目をそらす。

「も、申し訳ございませんパロックさま。パロックさまも存じのように、わたくしは天涯孤獨の身の上」

「うむ、それは知っておるが」

はて、それと炎に怯えることがどう関係しているのだろうか。

「わたくしは我が国の魔導士サブリーナの祖父アルフレッドさまに魔導の才覚を認められ、引き取られたのですが、そのきっかけは……わたくしの生まれした村で起こった大火でした」

そういえばベアトリスの幼少期に関して、パロックは詳しいことは知らなかった。

「そんなことがあったのか」

「村を焼き尽くした大火で、親しき隣人、兄弟、わたくしの両親も命を落としました。そのとき、幼いわたくしは初めてブリザードの魔法を振るい、それをすべて鎮火したらしいのです。で

すが、それ以来わたくしは炎魔法も使えず、火を見るだけであのとときの恐怖が甦るのでございます」

ふらりよろけた少女の細身の身体が、パロックに寄りかかっていた。反射的に抱きとめたパロックは、その柔らかさと温もりに陶然となる。

「国を預かる身としてはお恥ずかしい限りですが、炎だけはどうしても……身体がこわばってしまつて、何もできなくなるのです」

哀れげな女王への同情心を覚えつつ、浅ましい男の肉体は敏感に反応してしまふ。ズボンの中では生娘の純潔を散らしてきた剛物が、外に出たいとガチガチに勃起している。

(い、いかん。このまま欲望に押し流されるのは、勿体なさすぎる!)
これがしががない街娘であれば、この場で押し倒して薄布をびりびりに引きちぎり、迷うことなく猛りきつた凶器をねじり込んでいたことだろう。

だがパロックは知っている、乙女の純潔が失われるのはただの一瞬であることを。

無論、その後じっくり時間をかけて女体を開発していく楽しみもあるが、情緒も何もなくケタモノのように、この見事な肉体を食ってしまうのは、浅慮にすぎるといふものだ。

(あの小娘がこのようないい女に育つていたとは……それに、すっかり私を信頼しているようだ。その発育ぶりをじっくりと調べ尽くしてくれよう)

邪な思いなどおくびにも出さず、パロックは腕の中でひな鳥のように震える少女をそつと抱きしめるのだった。

「はあ……ベアトリスさま、今ごろ大丈夫でしょうか」

少しのんびり屋の魔導士ドロシーが、オーウェンの膝の上で憂鬱そうな表情を見せる。ほわほわとした雰囲気に似合わず、大胆に半裸身を晒したナイトドレスをまといつている。

「ベアトリスさまなら大丈夫よ、ねえオーウェンさまあ」

と、青年將軍の口にオードブルのピツクを差し出しながら、冷徹そうな青年の首筋に舌を這わせるのはウェンディ。

普段は魔導士の中でもリーダーシツプを取る人が多い、勝気な少女。それがいまでは、オーウェンが望めばどんなはしたない痴態をも悦んで晒す淫乱少女だ。

「ベアトリスは聡明な女だ。それに俺とお前たちでじっくりその身に悦楽を刻んだばかりか、それを完璧に隠蔽する術をも学んでいる。おボコ娘のふりをして、あの男の鼻毛を読むなど造作もなからう」

当初はグスタフ王に献上するため、ベアトリスの処女を奪わずにいたオーウェンだが、ベアトリス本来の美点である高貴さや優雅さは決して損なわぬよう、細心の注意を払っていた。決して荒っぽい愛撫を加えることな

く、ウェンディたち同性の少女たちによる繊細な愛撫。そして少しづつ拡張したアヌスは、そこの娼婦など足元にも及ばぬ芸術品として完成されている。

「ベアトリスには、ある程度肌は許しても処女は許すなど命じてある。ヤツには目の前にぶら下がったニンジンを追つて、我らの意のままに動く駄馬となつてもらおう」

「さすがはオーウェンさま」

「あんな、あたしたちを中古呼ばわりするようなオッサンはベアトリスさまにお任せして、久しぶりにあたしたちも可愛がつてくださいいっつ」

甘えたように身体を擦り寄せてくるドロシーの腰を抱き寄せると、ポリュームのあるヒツプに指を食いこませる。「きゃふううんっ」

(唯一、アレスどもの動向が気になるが、慌てることもあるまい。こちらにはヘステイアだけでなくパロックという手駒も手に入ったのだから)

膝の上に乗せたドロシーの秘唇にずぶりと肉茎をねじり込むと、オーウェンは力強くベッドを軋ませ、乙女の中をかき回す。

「さあお前も来い、ウェンディ」

はい……と潤んだ眼差しで舌を突き出すピンク髪の少女と舌を絡める青年將軍。先日、謎の魔剣を手に入れてからというものの、オーウェンの肉体はまさに疲れ知らず。得体のしれぬ活力が漲つてやまぬのだ。

パロックの相手はベアトリスに任せ、オーウェンは明け方近くまで少女たちを嬲り犯し、ついにはイカせすぎて失神させてしまったのだった。

3

(あのおとなしかったベアトリスがこうも無防備な姿を見せるとは……大國の女王といつても所詮女か)

さつきから、魔法國家のブロンドの女王は、生真面目すぎるほどの熱心さで、パロックの股間を撫でさすり続けている。

ときに強弱をつけ、膨らみの弾力を楽しむかのようなその手つきはまるで娼婦のようなだが、ベアトリスの下腹部からはまぎれもない処女の芳しい香りがパロックの鼻孔をくすぐっている。

「お前もようやく女は男に奉仕するものだ」と学んだようだな、ベアトリス。だがそんな拙い手つきでは私を満足なぞさせられんぞ?」

「もうしわけございません。殿方の股間がこんなに硬く、熱くなつてしまつたなんて……よろしければ、手ほどきしてくださいませるか」

だが本当は、思わず快美の音が漏れそうになるほど心地よい。

美少女の手の平は真綿のように柔らかく、ズボンの上からでも感じられる強制されたわけではないのに、異性の生殖器に好奇心を示しているのだからなおさらだ。

「これ、お苦しくはないのですか?」

なんでしたらベルトをお緩めになら
てはいかがでしょう」

「ぬひよっ？」

ベアトリスの白魚のような指が下着
の中に潜り込み、屹立した男根を引つ
張り出す。その手つきがまたぎこちな
く、初々しいのがたまらない。

もちろん、そのようにすることで自
分を性に無知な小娘と印象づけている
のだ。

「まあ……」
パロックのマラは確かに巨大サイズ
で、ベアトリスは思わず言葉をなくし
てみせる。

片端から街娘をかどわかつて……と
いうわけにはいかないものの、側室相
手に飽くことなくまぐわい続けてきた
結果、淫水焼けた肉竿は、赤黒いナ
マコのようなだ。

「お外に出してもまだ苦しそうです
わたくしになにかできることはありません
すでしょうか、パロックさま」

陰茎の勃起が性的興奮を意味するな
ど、この純真で無垢な娘は知らないの
だろう。パロックの中にむらむらと悪
戯心が湧き起る。

「このところ公務が忙しくてな。男と
いうのは疲労が溜まるところなつてし
まうものなのだ。女の役割は、こうな
った男を癒すことと心得よ」

と、酔ったふりをしてわざとよろけ
てみせるパロックを支えるように、ベ
アトリスは健気にも抱きついてきた。

葡萄酒で体温が上がりつつあるのか、

少女の甘い体臭がさつきよりも強く鮮
明に感じられる。鍛えていない胸板に
頬を擦り寄せ、顔を真っ赤にしてパロ
ックを支えようとする。

「お前ももうがんぜない子どもではな
い、これが大人の女の作法だ」

そう言つて、たおやかな少女の手を
取ると、厚かましくも股間の肉竿を握
らせようとする。

自分が醜い中年男に辱められようと
していることも知らずに——知らない
という表情を保ったまま——ベア
トリスはきゅつと男根に指を絡めた。

(成熟した身体とそれに似合わぬ無垢
さ……あのベアトリスをこうして弄ぶ
日がこよとは)

ごしゅ、ごしゅ、ごしゅ……本来は
もつと手首のスナップを利かせたほう
が、オーウエンは悦んでいたはずだ。

しかしいまのベアトリスは男に触れ
られたこともない可憐な乙女。少女は
わざと体全体をのしかからせるように、
パロックの茎をしごく。

「おう、な、なかなかいいぞベアトリ
ス。その調子だ……」

かなり酒が回っていたのと、ベアト
リスがわざとぎこちなくしごいていた
ため、パロックはなかなか射精には至
らなかった。

それでもよほど気持ちいいのか、パ
ロックは目線を泳がせ、鈴口からはだ
らだらと先走り汁がこぼれて少女の指
を汚す。

「パロックさま、痛くはないですか、

苦しくはないでしょうか」

心配げにそう声をかけても、中年男
は唇の端から涎を垂れ流さんばかりに
うひひと笑い、ベアトリスに身を委ね
ている。

「ああ……パロックさまに喜んでいた
だけなんて、わたくし望外の喜びで
ございます。さつきから胸がどきどき
して、いまにも心臓が破裂しそうな
ですよ」

驚きに目を丸くするパロックの右手
が、ベアトリスの胸に押しつけられて
いた。

服の上からでも十二分に感じられる
乳房の膨らみ、そして少女の鼓動。そ
れに実際、パロックのような中年に触
れられても、ベアトリスの身体は熱く
欲情していたのだ。

「お前の心臓も高鳴っておるぞ」
パロックの手はいつしか少女の乳房
にビタリとあてがわれ、肉球を揉み始
めていた。

晩餐の席だったので、デザインこそ
いつも同じだがこれは強化服ではな
い。あくまでも薄手の布地を指先でま
さぐると、すぐに硬くしこった突起物
を探り当ててくる。

「あんっ……!! ば、パロック、さま
……? なんですのいまのは、なにか
お胸がびりびりして」

「それが年頃の乙女の反応だ。恥ずか
しからず、私に身を委ねよ」
適当な言葉を垂れ流しつつ、パロッ
クはさらに大胆にベアトリスを抱き寄

せると、背後からすっぽり抱きしめて
しまふ。

そうして、両手に膨らみを収めると、
「もみゅもみゅ」と遠慮もなく揉みし
だき始めたのだ。

なんという破廉恥漢、なんという恥
知らず。しかし、ベアトリスはオーウ
エンの目論見が見事に成功しているこ
とに満足していた。

自分の肉体にあれだけの快楽を刻ん
でくれたオーウエンのためなら、この
程度は辱めとも思わない。

いやむしろ、ベアトリスがこの恥知
らずを籠絡すればするほど、オーウエ
ンは喜んでくれるだろう。

「むふふう、柔らかな肉球の中央で、
こりこりとしたものがしこつておるぞ。
感じているのか、ベアトリス」

ベアトリスは目元を赤らめつつ、わ
ざと自分からヒップを後ろに突き出し
ていた。パロックは少女の色香にあつ
さり引つかかり、適度な弾力のある少
女の尻肉にむき出しのイチモツを押し
つける。

「おお、おふ、おふうううっ」
かくかくと間抜けに腰を振るその姿
は、まさに浅ましく発情したオス犬も
同然。ベアトリスもその動きに合わせて
小刻みに腰を前後に揺らすものだけか
ら、パロックの顔は快美に歪む。

あと三擦りもしていれば、彼はベア
トリスの美しい碧のドレスを、汚らわ
しい白濁液で汚していたことだろう。
だが、その気配を感じたベアトリス

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



おすすめ作品
 お風呂でラブ×2
 学園ウィッチーズ
 小説 夜土郎 表紙イラスト ぶんぼん
 破邪弓巫女 ミヤビ
 小説 鎌奈路介 表紙イラスト 明地幸
 てんたま
 小説 斐芝嘉和 表紙イラスト あかめ
 銀河剣豪
 ムサシノツバキは修行中!
 小説 大熊理喜 表紙イラスト あかめ
 自衛団の聖女 詩鈴
 ～奪われた聖痕～
 小説 天戸祐輝 表紙イラスト ヨシカ

ルール無用の闇ファイト!
 淫らな責めが
 スター選手に牙をむく!

ローラーファイター
蘭花 ランカ

【小説】山本沙姫
 【表紙イラスト】トイト

敵に敗北したメタルスーツの
 ヒロインがその身体と力を蝕まれる!

レッドエンフォーサー **ルージュ**

【小説】蒼井村正
 【表紙イラスト】みかん。

【小説】空蟬
 【表紙】秋月からす
 フェリーシア
 エルフの守人

【小説】葉原鉄
 【表紙】秋月からす
 学園輝装
 ミステイドラゴン

【小説】上田ながの
 【表紙】ひななくま
 鬼巫女さま

【小説】高岡智空
 【表紙】舞猫ルル
 聖海の巫女
 夕風時乃

【小説】狩野景
 【表紙】明地幸
 血弾の
 ナスターシア

書き下ろし作品が続々登場!!

電子書籍 **2D POKET NOVELS** 二次元ぶち文庫
二次元ぶち文庫

DLサイトコム <http://www.digiket.com/books/>
 デジケット・コム <http://www.dbsite.com/books/>

各電子書籍
 サイトにて
**大好評
 配信中!**

ポイント^{をためて}
限定グッズを手に入れよう!!
購入するとポイントが配布されるぞ。そのポイントでプレミアムグッズゲットだ!

1 KTCの
KTC's premium telephone card
**プレミアム
テレカ**

6月の時点で
200種類用意!
うるし原智志先生をはじめとする、
人気作家渾身のイラストを使用!



2 書き下ろし
KTC's premium electronic novel
電子小説

上田ながの先生書き下ろし
『聖換天使エクセラグナ』
の外伝小説が読める!



3 書き下ろし
KTC's premium electronic comic
**電子
コミック**

ばふえ渾身の
描き下ろし!
『変幻戦士
ギルティセイヴァー』



4 書き下ろし
KTC's premium electronic illust
**電子
イラスト**

柳原ミツキ、8000
描き下ろしイラスト!



今、会員登録
するだけで
500pt ポイント
プレゼント

キルタイムコミュニケーションの
電子書籍サイトがOPEN
<http://ktcom.jp/shop/>

ここでしか購入できない
オリジナルコンテンツも
登場!

『エルフの国の宮廷魔導師になれたので
姫様に性的な悪戯をしてみた2』
デジタルブレイクでしか読めない
ショートストーリー付き!



読者還元型 デジタルコミックサイト
KilltimeDigitalBreak
キルタイムデジタルブレイク



KTC 運営 **キルタイムコミュニケーション** 〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL:03-3551-6167 (通販) FAX:03-3297-0180

PC・スマートフォン対応

▶最新情報は公式サイトへ! [キルタイムデジタルブレイク](http://ktcom.jp/shop/) <http://ktcom.jp/shop/>